

道類姫

神歌集



昭和二十一年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和四年四月二十八日印刷
昭和四年五月一日



新しん鮮せんな□□□

初夏しよがの流行りゆうこうに輝かがやく……五月ごがつの三越

若葉青葉わかばあおばにオレンジ色いんげんいろの光ひかりは洩もれて、淡色たんいろの襟えりに映うつゆる紅唇べにくちびるの清々すがさしさよ。

三越さんごつの店内うちいも初夏しよがに匂におふて、香水かうすい、カットグラス、藤椅子ふじいす、武者人形むしゃどくろがたなど新鮮しんせんな五月ごがつを飾かざりました。

大阪

越三越

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



喜又屋食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

道頓堀

昭和四年五月號

第三十二輯

表紙……(妹脊山婦女庭訓)

大塚克三畫



口

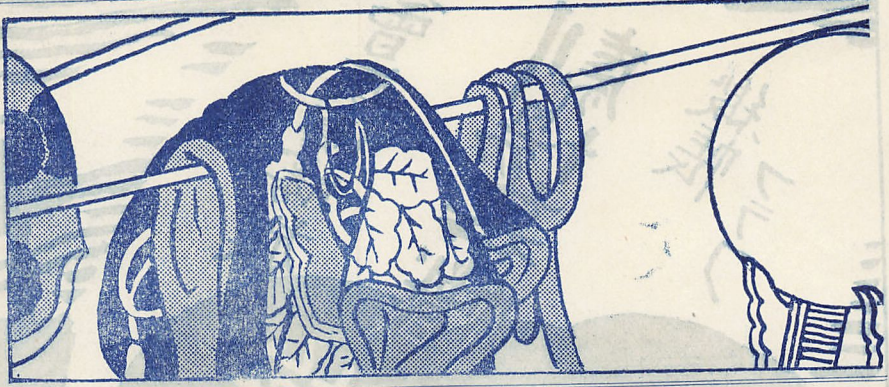
繪

扉

◎中座五月興行上演◎中村鴈治郎の唐津屋榮三〇◆「妹脊山婦女庭訓」御殿の場、訥子の入鹿大臣、箱登羅の宮越支蕃、政治郎の荒巻彌藤次、延若の漁師鱈七、鴈治郎の烏帽子折求女、魁車の橋姫、宗十郎の松酒屋お三輪◆「開化夢見草」舞臺面、延若の伊丹屋重助魁車の杵屋小さん、箱登羅の宮戸川兼八、實川延若の伊丹屋重助◆「旅路の花笠」舞臺面訥子の早野勘平、扇雀の腰元おかる、澤村宗十郎の杉酒屋お三輪◆「暹羅船」舞臺面、上南宗寺墓所の場、中唐津の店頭おかる、中唐津杉座敷の場、中村魁車の母親おちせ◆「暹羅船」舞臺面、上戎島海岸の場、中唐津屋店頭の場、下中村扇雀の妹お小夜◆「明烏夢泡雪」舞臺面、上福助の山名屋浦里、蓮女の遣り手おかや、下山名屋二階の場、宗十郎の春日屋時次郎、福助の浦里◎浪花座五月興行上演上櫻のもし◆舞臺面、上茶屋の深夜の場、壽三郎の松村七郎、徳三郎の芥見左近、下廣庭の自刃の場、我童の織田信長、大吉の溝口七太郎、福助の溝口よし、蓮女の乳母初女◆「今様かしく」舞臺面、河合のかしく、村田のおくら、霞仙の定榮、大矢の兄文藏◆「道行浮城鳴」舞臺面、上ひさのお染、長三郎猿曳、林長三郎の猿曳◆「股旅草鞋」舞臺面、上利根川沿岸の場、下布川旅籠屋屋根の場河合のおつる、壽三郎の富五郎◎河合武雄の藝妓かしく◆「夏時雨清十郎塚」下但馬屋座敷牢の場、上片岡我童のお夏◎角座五月興行上演◎上まづ健康」中「眠駱駝物語」小織の屑屋久六、藤村の半次、石河のおやす、「五月晴」東の靜子◎辨天座五月興行上演◎文樂座人形淨瑠璃◎樂天地五月の新潮劇「琵琶歌」の舞臺面

芝居物語と脚本

- 芝居物語…妹脊山婦女庭訓……………加世三癖(六)
- 脚 本…開化夢見草……………田中總一郎(二〇)
- あふむ石…旅路の花笠……………(二〇)
- 芝居見儘…暹羅船……………(二四)
- 臺 本…明烏夢泡雪……………(三二)
- ……………林喜美雄……………(二四)



□芝居ばなし股旅草鞋……………津守凡太郎(三八)
 □芝居ばなし今様かしく……………依田覺三(四三)

◆考證と研究◆

□苧環の糸のくり言……………高安吸江(二)
 □『股旅草鞋』と渡り鳥生活……………長谷川伸(四三)
 □妹脊暖語……………森ほのほ(五二)
 □妹脊山雑話……………川尻清潭(五四)
 □『鱧七』私見……………高谷伸(六一)
 □「明烏」の隨筆……………高原慶三(五九)
 □大阪の好劇家へ私議提出……………富田泰彦(六三)

□出演の挨拶に替へ……………澤村訥子(二〇)
 □雑感 一把……………澤村宗十郎(二二)
 □道行百集……………勝彦輔(六五)

劇壇その日

□中座……………(六七) 辨天座……………
 □浪花座…………… 神戸八千代座……………
 □角座…………… 其他……………
 □編輯後記……………松本泰三(七二)
 □挿繪カット……………大塚克三

留取價勝旗

製印真織

綴帳

梅原商店

神戸市

楠

門

番五一六一町元

電話



お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

食慾をそよる春のお献立が

お待ち申してゐます

園
梅
園

お芝居でのお合堂にて……………

お歸りには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを……

中
座
食
堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話 南六二二七番

お芝居の
あいまには
高尚で趣味深い
寫眞のお道樂が
いッちよろしい!

寫眞機は

リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ

(カメログ進呈)



大阪市南區長堀橋筋一丁目

小西 六 大阪 支店

本店

東京

本町二丁目

電話 南一三九八三番



中座五日月興行上演

唐津屋榮三郎……中村鷹治郎



中座五月興行上演
「妹春山婦女庭訓」

御殿の場

上 入鹿大臣：訥子

宮越之番：箱登羅

荒卷彌藤次

政治郎

中 漁師鱈七：延若

烏帽子折求女

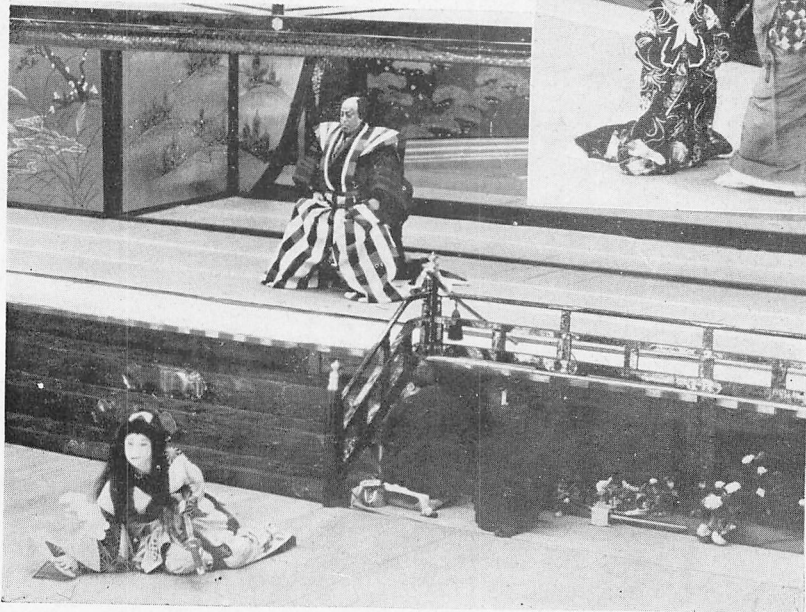
鷹治郎

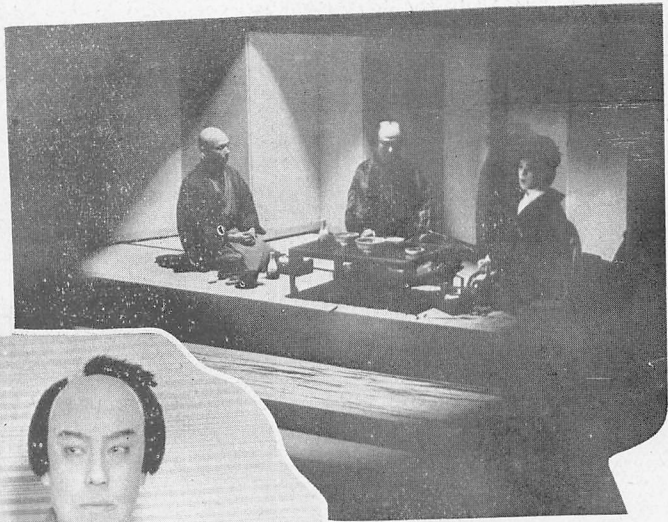
橘姫 魁車

下 漁師鱈七：延若

杉酒屋お三輪

宗十郎





中座五月興行上演

上 「開化夢見草」舞臺面

伊丹屋重助……………延
 杵屋小八……………魁
 宮戸川兼八……………箱
 伊丹屋重助……………實
 川登
 延
 若車羅若



中座五月興行上演

上 「旅路の花智」舞臺面

早野勘平……訥子

腰元 おかる……扇雀

下 杉酒屋 お三輪……澤村宗十郎

◆ 陣畫映る飾を春晚 ◆

蒲田十周年記念映畫

牛原虚彦監督

「進軍」

マーチング・オン
オールスタキヤスト

阪妻プロダクション特作品

「近藤勇」

後篇
阪東妻三郎 主演

蒲田撮影所超特作品、牛原虚彦監督

菊地寛原作

「大都市」

労働篇
鈴木傳明 新井淳 共演
田中絹代 藤野秀夫

京都撮影所特作品、大野英治監督

「槍の権三」

林長二郎 主演

京都撮影所特作品

「松平長七郎」

林長二郎 主演

蒲田撮影所超特作品、五所平之助監督

「新女性鑑」

共演
藤野秀大、渡邊篤、結城二郎、山内光
田中絹代、龍田静枝、筑波雪子

蒲田見里・原淳作・島津保太郎監督
田原淳作・島津保太郎監督

「多情佛心」

トスヤキータスルーオ

松竹キネマ株式会社

アングロス井ス

ミルク チョココレイト

コーヒ キヤラメル

チョコ
レイト キヤラメル

製造元

アングロス井ス
コンフエクシヨナリコンパニー

大阪市東區豊備町三番地

發賣元 株式會社

横山商店

各劇場内賣店及
百貨店に販賣せり

電話 東二〇六一三番
振替口座 大阪二八四七番
東京一六二七八番





中座五月興行上演

「暹羅船」

上 南宗寺墓所の場

唐津屋榮三郎… 鷹治郎

中 唐津屋の店頭の場

下 唐津屋の座敷の場

母親 おちせ… 魁車



中座五月興行上演
 「暹羅船」
 上 戎島海岸の場
 中 唐津屋店頭の場
 下 妹お小夜……中村扇雀



中座五月興行上演

〔明烏夢泡雪〕

上 山名屋 浦里……福

遣り手 おかや……蕙

下 山名屋二階の場

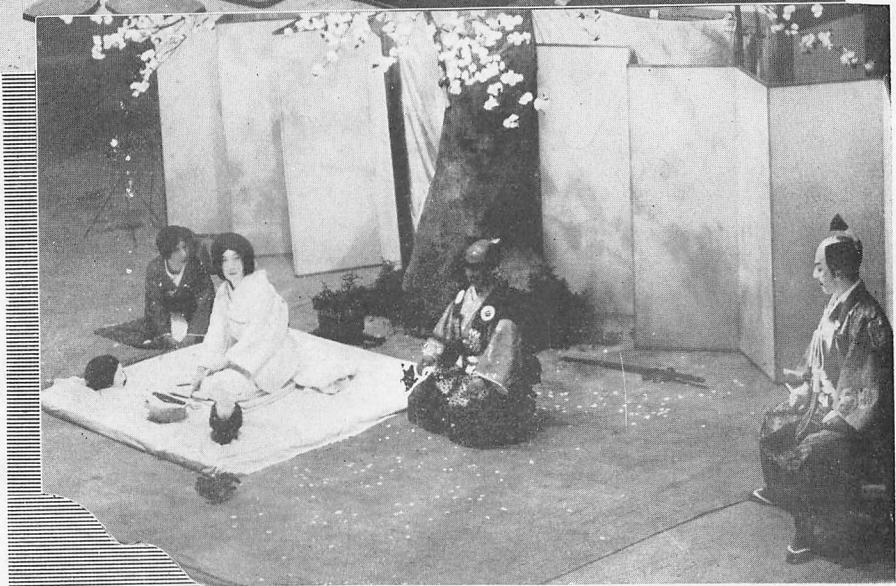
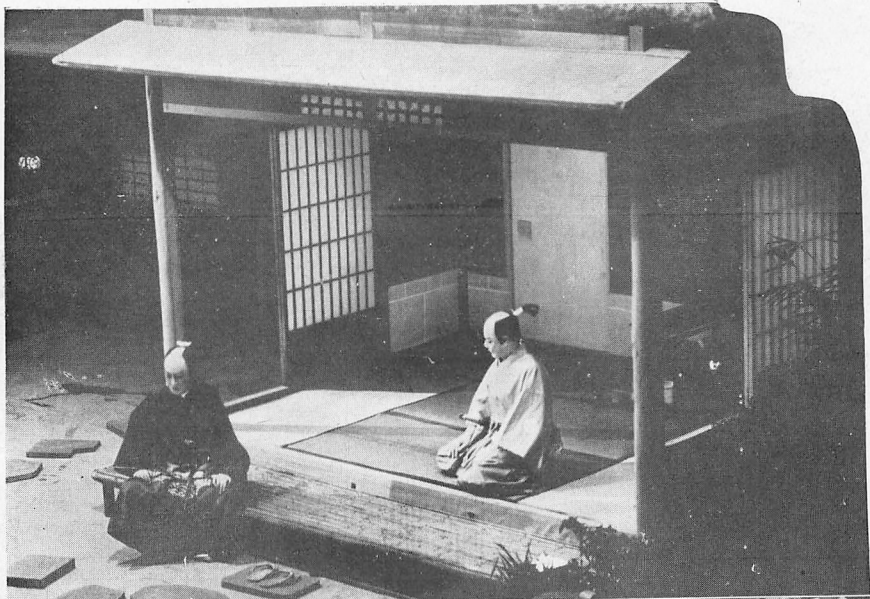
春日屋 時次郎……宗

山名屋 浦里……福

十

助 郎

女 助



浪花座五月興行上演
「櫻のもこ」

上	茶屋の深夜の場	松村見自田口母	七左の場	郎近	……	壽德	三三	郎郎
下	廣織溝乳	田口母	信太の場	長夫	……	我大福		童吉助女

へ
田
ヒゲタ
醤油
油

九
舛
樽
詰
ニ
リ
ツ
ト
ル
樽
詰

御近所の酒醬油店にて御買求を乞ふ



73

クレオパトラの美身料

パームオイルで造つた

松竹石鹼

我が國で始めて完成された

「お肌の榮養」となる……………

パームオイル松竹石鹼は

刺激性のない、泡立ちの細い、肌觸りの滑かな榮養美身料で……
洗粉、クリーム、ぬか袋等の必要が絶対にありません
お肌やお髪をいつまでも美しく健かにします
乳兒及産前産後の方の石鹼として、亦理想的であるこの賞讃を博して居ります

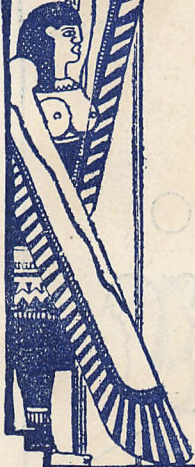
大阪市東成區鴨野町

松竹石鹼工場

大阪市東區南久寶寺町四

朝日堂株式會社

りあに店薬品粧化名有・店貨百國全





浪花座五月興行上演
「今様かしく」

かしく……河合 武雄
母おくら……村田 式部
定 榮……霞 仙
兄 文 藏……大矢市次郎

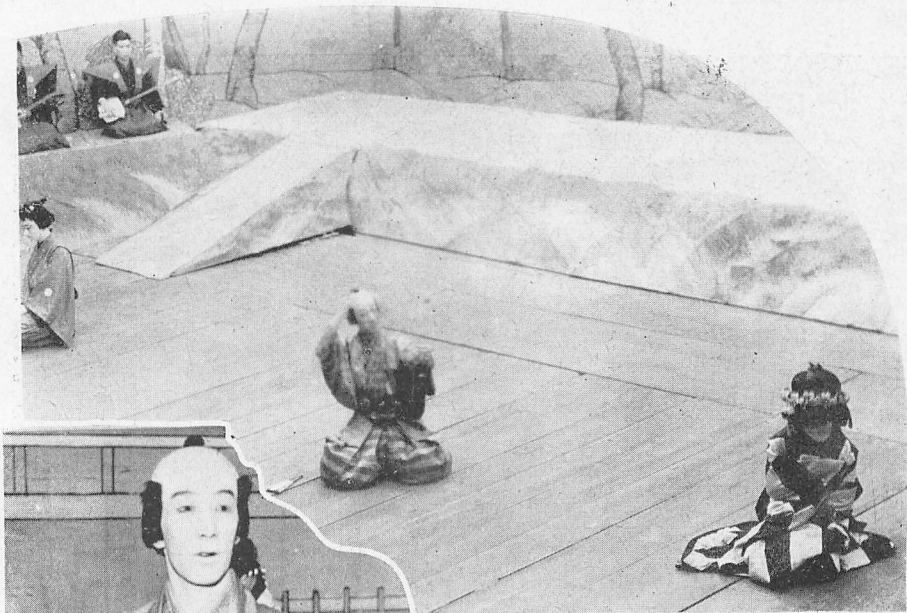
訂 正

口繪 第十頁中林長三郎の丁稚久松は

猿曳の間違ひ

口繪 十二頁中河合武雄藝妓かしくは

女房おつるの間違ひ



浪花座五月興行上演

「道行浮城鷗」

江戸隅田川堤

上	油屋娘お染……ひ	さ
下	丁稚久松……林	し
	丁稚久松……長	三
	丁稚久松……長	三
	丁稚久松……林	郎

進呈

九升樽詰一挺お買上毎二

宇治・ほうじ茶

香保里一罐宛



淡口ノ親玉

日本丸天醤油株式會社

大阪市東區高麗橋詰町

發賣元

柿浦佐一郎

電話東 二五六一
四八三二



裂 小・具道小

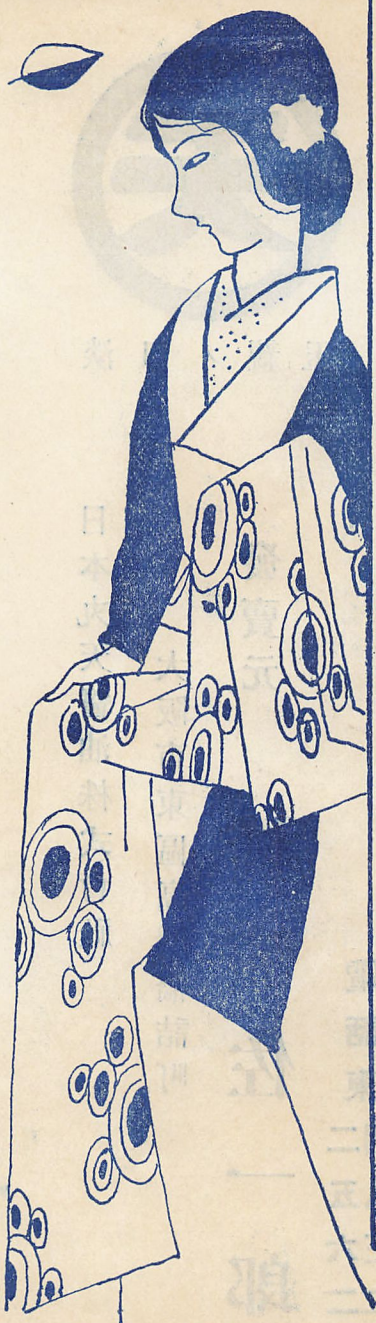
貸衣裳

素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳



松竹衣裳部

本店

東京支店

大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四一八一番

東京市淺草區並木町十五

電話 淺草五五九九番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます



浪花座五月興行上演

「股旅草鞋」

上 利根川沿岸の場

下 布川旅籠屋の屋根の場

女房おつる……河合武雄

免鳥の富五郎……壽三郎



浪花座五月興行上演
藝妓かしく……河合武雄

の 一  本日

命生本日

契約高 七億五千餘萬圓
契約人員 六十四萬餘人
總資産 一億九千餘萬圓



石盤礎基

目丁四橋今区東市阪大 店 本

御園白粉

純無鉛



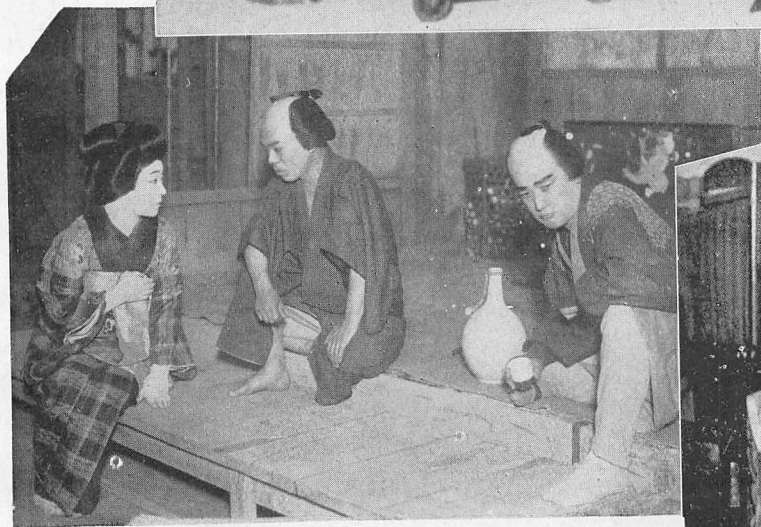
美に人の氣の中
くや輝すます
質品の第一良優

本鋪 伊東胡蝶園



浪花座五月興行上演
 「夏時雨清十郎塚」
 下 但馬屋座敷牢の場
 上 娘 お 夏……………片岡我童

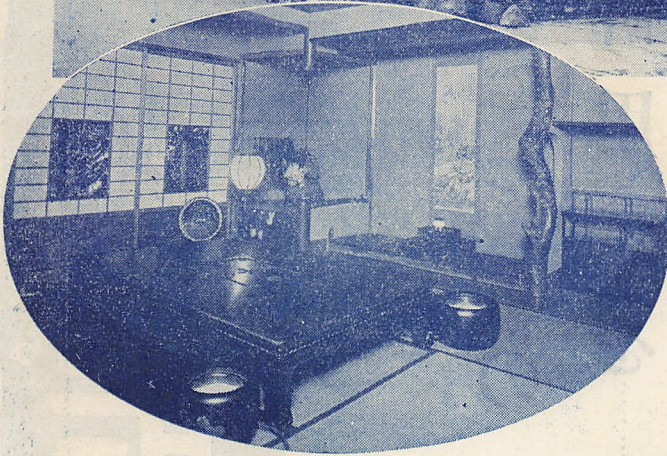
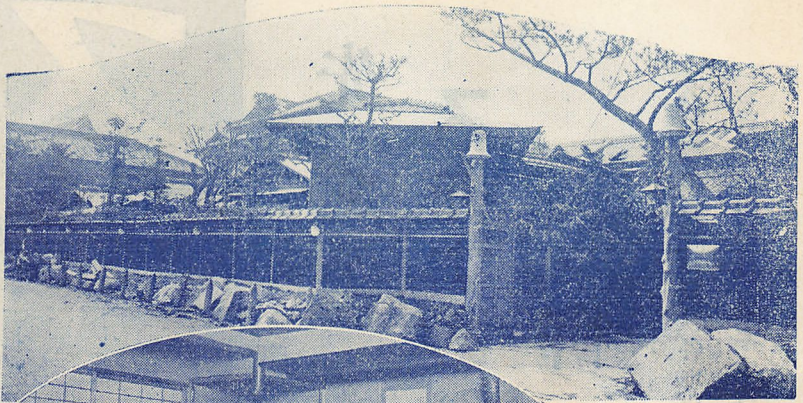




上演行興五月座角

上	「ま	づ	健	康	天	
	櫻	井	仙	助	十	
中	父	駱	松	郎	小	
	「眼	屋	物	語	藤	
	溜	屋	久	六	石	
	手	斧	の	次	半	
	妹	お	や	す	子	
下	「五	お	月	晴	東	
	町	田	静	子	愛	

外吾 織村河子



名代割烹
電氣旅館

電話自室
 二二一
 番(四七)

舞臺付百疊敷
 大宴會場落成

スキナ脂取紙

あぶら

先ず

スキナあぶら取紙の

御用意を

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり
 お買求めの節は「スキナ」と御指定を乞ふ

現品縮圖
 スキナあぶら取紙



“GREASY SWEAT ABSORBER”
 Take off a leaf of Greasy Sweat Absorber and pass over the face. The effect is that all greasy sweat will be soon absorbed and extremely light broom will be left.

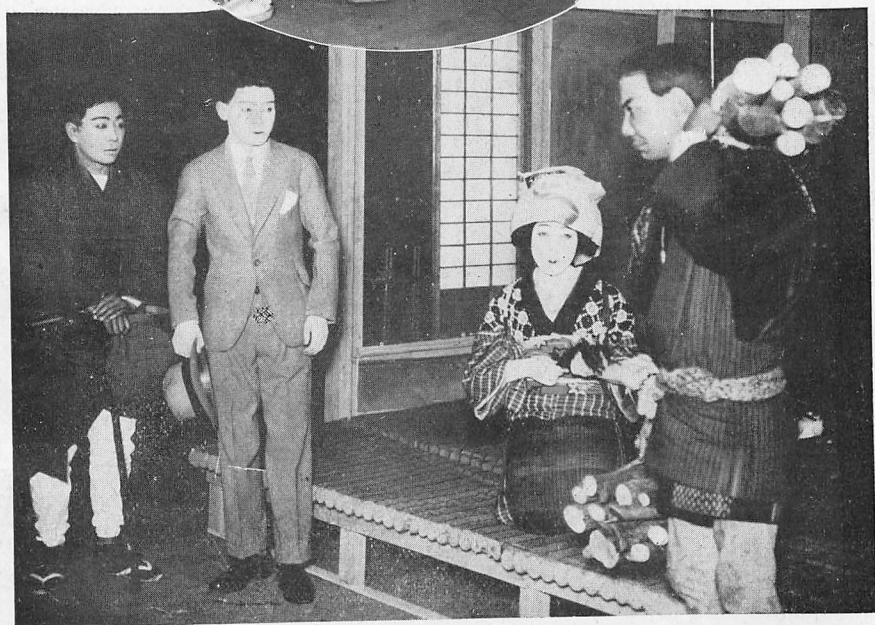
本 舖
 ナキス 屋 號
 中 田 商 店
 大 阪

辨天座五月興行

文樂座人形淨瑠璃

- 上 「戀女房染分手綱」香掛村の場
- 中 「一谷嫩軍記」熊谷陣屋の場
- 下 「戀女房染分手綱」坂の下の場





樂天地五月興行の新潮劇
 「琵琶歌」の舞臺面

荒	井	三	藏	都
三	の	里	野	三
武	妹	真	次	野
西	田	禮	太	波

築好澤多



松竹土地建物興業株式會社

本社 ● 大阪市南區久左衛門町八

電話 (75)
 八七三
 一八九四
 二一八八
 二四〇八
 八三二〇
 六八三二
 五五五〇

京都出張所 ● 京都市河原町三條下

電話 中 二三五二

經營劇場

大阪	松竹座	浪花座	中座	角座	朝日座	辨天座
大阪	文樂座	樂天地	春日座	新世界松竹座	京都南座	京都座
京都	夷谷座	歌舞伎座	松竹座	松竹座	新松竹座	聚樂館
京都	名古屋	松竹座	松竹座	松竹座	松竹座	松竹座

五月號

月刊・演劇研究・雜誌
道類編

第四年

第三十二輯





苧環の糸のくり言 五月の中座について

高安吸江

され共此人、夜は来れども晝見えす。或夜の陸言に、御身
いかなる故により、かく年月を送る身の、晝をば何と烏羽玉
の夜ならで通ひ給はぬはいと不審多き事なり。唯同じくはと
こしなへに、契をこむべしとありしかば、彼人答へ云ふやう
實にも姿は恥しの、もりて余所にや知られなん。今より後は
通ふまじ、契も今宵ばかりなりと、懇に語れば、さすが別
れの悲しさに、歸る所を知らんとて、苧環に針をつけ、裔に
これをとちつけて、跡をひかへて慕ひ行く。

まだ青柳の糸ながく、結ぶやはや玉の、おのが力にさゝがに
の、糸くり返し行く程に、此山本の神垣や、杉の下枝にとま
りたり。こはそもあさましや、契りし人の姿か。其糸の三わ
げ残りしより、三輪の験の過ぎし世を語るにつけて恥しや。
これは謠曲三輪のクセで世阿彌の作と云はれて居ります。桓
武天皇御不例の時、その法力によつて惱忽ち御平癒あらせられ
らたと傳へれる名僧女僧實都(弘仁九年六月一四七・八八十餘

歳寂)の庵へ女姿の三輪明神が現れて、神武の昔語るする其一
節です。芝居でする妹春山の四段目に、此からの趣向を立てた
といふ事は無論直に想像せられますが、猶その道行戀のをだま
きに「左様こがるゝ戀路にて晝をば何と、烏羽玉の夜ばかりな
る通ひ路は、いと不審なり名所を」とか「問はれて實にもはづ
かしのもりて、あまれる、浮身の上」又段切で「思へば伊勢と
お三輪が菩提」(謠の方では「思へば伊勢と三輪の神」)等の
文句によつても立派に證明せられます。

元來淨るり作者が謠曲をネタにするのは近松を始めとして、
殆ど常套手段とも云ふべきであります。此妹春山(作者は儒
者穂積伊助の子で近松の養子だつたといふ半二をはじめ、松田
ばく、榮善平、近松東南で後見の三好松洛は七十六でした)も
同様であるのは上述の通りであります外、御殿で局達に「四海
波(高砂)など謡やいの」と云はせ、お三輪には「何と千秋萬
歳の千箱の玉(難波)の血の涙」と泣かせたりします。次に幸

若の大織冠でもそうですが、謠曲の海土で、大臣御身をやし、卑しき海人乙女と契をこめ、と云ふ筋を杉酒屋の隣に烏帽子折求めとなつて身を忍ぶ淡海公とお三輪の情交とし、一ツの利劍を抜き持つて、海中に飛入る活動は、四段目の切で十握の劍が御溝の水中で、金龍となるのを、たとへ誠の悪龍なりとも、何か恐れん夫の爲め、腮にかゝりて死ぬるとも厭はぬと逆立つ浪に躍り込む橘姫が勤めて居ます。

それから此三輪の傳説でありますが、此れは舊事記、釋日本記に出て居る大己貴神話が原であるやうです。それによると大己貴神が天羽車に駕つて、大空を飛行自在に逍遙して居らるゝうちに、節度縣で大陶祇の女活玉依姫を戀して潜に通はれたのを、始めは誰も知る者が無かつたが、終に姫が身重になつた爲に父母が怪しんで尋ねた處、神様のやうな御方が屋のむねから來られると答へたので、そこで苧環に針をつけて其神人の裳に着けておくと、翌朝になつて見れば其糸が鑰孔から出て節渡山を經、吉野山へ入り、三諸山に留まつて居る事がわかつた。卷いてあつた糸が三わがね残つて居たので是より三輪と云ふ名が出来たのです。此傳説によると大己貴神は男神であるわけです。其女姿について種々と説もありますが餘談であるからこゝには略します。

此と多少の關係をもつのが箸塚傳説です。崇神天皇の姑倭迹

々日百襲姫命が大物主神の妃となられました。一體こう云ふ戀物語にはよくあることで、常陸風土記に出て居る、蛇を生んだ努賀毗古、努賀毗咩兄妹の傳説でも左様ですが、神は夜ばかり来て晝は一向見えない。それで婚命は一度神の御顔を拜したいと願はれました處、尤であるから明朝櫛笥の中に入つて居やうが驚いてはいけなしいとの御返事でした。そして翌朝紐ほどの長さの美しい小蛇が櫛笥の中に蠕つて居るのを發見した姫は、約束を忘れて驚き恐れた爲に、神は怒つて直に大空を踐んで御諸山上つてしまはれ、姫は後悔のあまり箸を陰部に突立てゝ自殺せられたと申します。

此苧環と箸との二説を一緒袖中抄、「昔大和の國に男女相住みて、年來になりけれど」云々と書き出し、先づ櫛笥の小蛇の段で女が驚いた後、その夜また男がやつて来て「我を見て驚き思へり、實に道理なり、我もまた來らん事恥なきにあらんす云々」と名と名残を惜んで苧環の條にうつり、糸は三輪明神の祠の内に入つて居たとなつて居ります。

同様の傳説が九州にもありますから序にお話しませふ。即ちそれは日向風土記です。日向の鹽田に富豪の一人娘で花の本といふ素敵な美女がありました。或夜水干立烏帽子の二十才ばかりの美男子が通ひ始めましたが、お定まりの如く夜來ては曉に歸ります。そこでやはり苧環の針を襟に刺し、翌朝その糸をし

るべに尋ねて参りますと、そこは日向の國境姥ヶ嶽の岩穴です
穴の中からは苦しそうな呻き聲がします。その主は花の本の夫
で、針の爲めに胸を刺され瀕死の状態にあります。自分の姿を
見せると皆が恐怖れるであらふ事、花の本は今姪娘中で、世に
も稀な勇士が生れる筈だから、其名を大太惟基と付けてほしい
事、そして自分はその守護神とならふなどと申します。娘も兩
親も之を聞きいと悲しみ、一目でも姿を見たいと頼みました。處
が、恐ろしい顔をした大蛇が頭ばかり出して見せました。此こ
を正しく姥ヶ嶽大明神であつたのです。猶此後生れた子は至つ
て力強く足に胼胝が多かつた處から人は大童と名付けました。が
後に大太大神惟基と呼ばれて、豊後國を押領し大太豊後守と云
はれたとの傳説もあります。

古今著聞集にある攝津國ふきやの貧女の話などに見るやうに
それが總針のやうな細いものであつても、武器ならば毒蟲を制
するものが出来るといふ一種の信仰が、大已貴と大物主との神
話を一ツにまとめて出来た袖中抄の話説に織り込まれて、此九
州の傳説が成り立つたものらしく且その記載も稍詳しくなり古
代の單純さから大分遠ざかつて来て居ります。そして此傳説が
更に潤色されたのが源平盛衰記帖卷(第三十二)にある緒方三
郎平家を攻むる事の條で、平家の一門を九州から追出した尾形
三郎惟義は大太から五代の孫に當り『三郎は蛇の子の末を繼ぐ
べき驗にや有りけん、後に蛇の尾の形と身に鱗の有りければ尾

形の三郎といふ』などと書かれてあります。即ち單なる神話か
ら小説的な物語化して英雄談に移り行くさまが面白いではあり
ませんか。

英雄談と云へばテゾイス物語を憶起します。話は希臘の太古
へ飛びますが、トレイウエンの王女で夫アテン王エゲウスに捨
てられたエトラ姫の子がテゾイスです。彼がやつた種々豪勇譚
の中で尤も有名なのは迷宮で怪物ミノタロウスを退治した事で
すが、此れがまた芋環に關係して居ります。

アテンの國はクレイタ島と平和を結ぶ爲には、九年毎に七人
の少年少女を貢物として其島へ送らなければ、神々の怒を和げ
ることが出来ないとのデルフォイの神託に従ひ、既に二回は實行
せられ、今や將にその第三回の圖が引かれやうとする時に、テ
ゾイスは歸國したのです。貢に當つた兒等は迷宮にほり込まれ
其中に住む怪物半人半牛で獅子の様な齒をもつとも云はれ、又
龍の様だとも記されて居る——の餌にされるのですから、斯く
祖國が受けた侮辱には我慢が出来ず、奮然としてテゾイスは、
嫌がる父王を説き伏せ、七人の犠牲者の中へ加はりました。

迷宮といふのは、天才の工匠で當代の第一人者たるデダロス
が巖を切り開いて造つたもので、八幅の鉸知らずや孔明の八陣
以上に、一度その中へ足を踏入れた者は誰一人逃げ出すことが
出来ません。其上無手であの恐ろしいミノタロウスに對して、
どうして勝が得られませうか。幸なる哉この勇敢な王子は

例のデルフィの神託にまかせて、いつも、いつもアポロ神の外に、アフロディテ（即ちヴィーナスの事）の神を守護神に頼みました。其お蔭でもあつたか、彼はクータ王ミノスの女アリアドネ姫に戀せられ、姫はアデン人であるデグロスの教に従ひ、緒環の糸と魔力をもつた名剣とを密に其愛人に贈つたのです。其結果として剣は怪物を殲し、糸は王子を安全に迷路から救つたのは申すまでもありません。

緒環寶劍。姫は父に背いて愛人を助け、糸は情夫の住處を尋ねるのでなくつて、却つて彼を死地から脱れしめる道案内の役をつとめます。前に述べた日本の神話とはかくとし、是を妹脊山と對照しますと、糸の導く處は怪物ミノタウロスで、さしづめ入鹿に當り、アリアドネは無論橋姫、糸の切れた爲に可愛やお三輪は御殿の迷路で惱まされます。但淡海公が後に圓滿な家庭を作つたに反し、テゾイスは武勇に於ける成功程、戀には好運には恵まれず、斯くして得たアリアドネを酒神バックスに奪はれ、アマツオーネン女國の勇將アンチオーペ姫は彼の爲に戦死し、アリアドネと瓜二ツの妹フェドラや、ツオイスの大神が白鳥と化して忍んだスパルタ王妃レダの娘のヘレーネとの情交も圓滑ではありませんでした。此ヘレーネ姫こそは、彼のホーマーが歌つたやうに、卅年も續いたトロヤの戦争をひき起さした天下第一の美人の事なのです。

話が少々脱線しそうですから、緒環をたぐつて本道へ歸りま

す。扱五月の中座で此妹脊山の御殿が演ぜられるそうだが、五ヶ月も打通して道頓堀に居居るといふ記録破りの鷹治郎の活躍、その精力の盛な事は實に目ざましいものと云はねばなりません。殊に單調を嫌ふ現代大衆に向つて不斷の變化を提供せんとする努力は、實際察するに餘りありと云ふべく、甚だしく彼自身を勞せず、演勝手もよく、効果の比較的多い適當な出し物を見つけるのは中々困難でありましやう。そこで斯う云ふ意味から今回の求女を考へますと、それは去大正十二年三月にやつた久我之助に比べて不得策で、筋から行つても萬事吉野川の方が遙に美しいのは事實です。先年は多見藏の大判事、梅幸の定香、雀右衛門の雛鳥でしたが、惜い事に此中二人まで故人になつてしまひました。私は吾が崇拜する鷹治郎君が何故此大判事を買つて出て、模範的大歌舞伎の味を後進に示さなかつたかと甚だ残念に思ふのです。

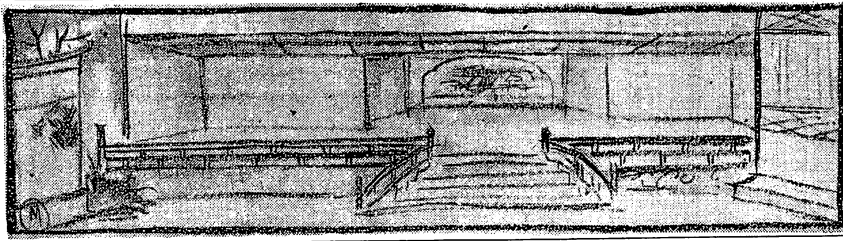
さはれ技巧を主とした出雲を師とした松洛、半二等はよし近松のやうに温情味に乏しいとしても、趣味の深い傳説を臨梅し吉野川の雛祭に對して四段目は七夕で、紅白の糸巻、女は白、男は赤、それからむ戀の三角關係、秦の阿房に比すべき宮殿に一升徳利上げた撥鬢頭の大男を配する等、巧妙な趣向の中に王朝物の絢爛さを遺憾なく示して居ます。しかも其れが顔揃ひの上にすべての點に完備する、中座のやうな大舞台に於て如何に其眞價を發揮し得るやは、好劇家にとつて期待の一つであらねばならぬと考へられます。

中座五月興行上演

妹脊山婦女庭訓

御殿の場

加世三癖



今を時めく蘇我の入鹿大臣が山の御殿である、舞臺一ツばいに飾られた高二重の目も覚めるやうな……

宮越女蕃、荒卷彌藤次の二人の見かけは強さうな侍臣と緋の長袴をつけた官女數多、入鹿大臣に献上もの、披露に及び、御酒宴遊ばせといふ事になります

〽と取りくりに手まつさへぎる盃の、廻れやゝ萬代もつきじつきせぬ歡樂の興を催す其所へ
入鹿大臣は心地よげに大盃を傾ける時

『ものもふ頼みやんせふ』
とてつものない大きな聲で案内を乞ひなが

ら

〽はつびんあたまたまの大男、御殿間近くつかくく、着たる木綿の長上下のソレやきばつて立はだかり

鑓七が遠慮會釋もなく出て來ました、その無作法を責めると鑓七は難波の浦から鎌きりの大身(註鑓足の大臣)から使ひに雇はれたといふのです、玄蕃、彌藤次の二人は鑓七が刀の下緒にぶら下てゐる、一升徳利を見知らねば、唐土の飛道具かといふかります、鑓七は鑓足からの土産の酒だと云つても毒酒だらうと云つて取合ひません、鑓七はさらば毒味をする
と云つて徳利の口呑み、南無三皆呑んでしまふた、ひよんな事をしてのけた、ひよつと鑓殿に逢はしよと儘よ、おれが呑んだと云はずに、よう届いたと禮いふて下んせやと鑓七はや
とてつものない大きな聲で案内を乞ひなが
〽はつびんあたまたまの大男、御殿間近くつかくく、着たる木綿の長上下のソレやきばつて立はだかり
鑓七が遠慮會釋もなく出て來ました、その無作法を責めると
鑓七は難波の浦から鎌きりの大身(註鑓足の大臣)から使ひに雇はれたといふのです、玄蕃、彌藤次の二人は鑓七が刀の下緒にぶら下てゐる、一升徳利を見知らねば、唐土の飛道具かといふかります、鑓七は鑓足からの土産の酒だと云つても毒酒だらうと云つて取合ひません、鑓七はさらば毒味をする
と云つて徳利の口呑み、南無三皆呑んでしまふた、ひよんな事をしてのけた、ひよつと鑓殿に逢はしよと儘よ、おれが呑んだと云はずに、よう届いたと禮いふて下んせやと鑓七はや
とてつものない大きな聲で案内を乞ひなが

『ア、まだ何やら言傳つて来たが落しやせんかしら』

と懐から書面を取り出して渡します、彌藤次が披いて讀み上げる文句は、鎌足が入鹿の威光を稱へ臣下に列す印に桃花酒を獻ずと云ふのです、が邪智深い入鹿は中々以て領きません、鎌七の釋明………でやつと入鹿も云ひまげられて、鎌足が實否をたじすまで人質にすると云つて入鹿は秋殿で天盃をめぐらさんと皆を引つれて奥へ入りました、殘されて鎌七は酔が廻つたところまでせぶつてこまさふと云つたが腰にさした刀が邪魔だといふので抜き取つて縁へ置きました、その音を合圖と心得たか、縁下から突出された鎗、鎌七はにつこり笑ひました

『悪い細工の』

と引ぬいて、ころりと寝る不敵さ、

へひぢまくら、不敵なりける男なり、御所より外へ喚かぬ若木、こだちが入り替はり男兒に來る、あいそには

お茶よ、お菓子よ南竹盆、銚子土器持出でて、

以前の官女達が銚子、盆などを持つて出て來ました、鎌七に盆をすゝめます、鎌七は腹ばいながら貴様達は誰ぢやと官女達とさんくになぶります、官女達は各々が口説き模様やらで、鎌七にぢやらつきます

『エ、けたいな、げんさいめらじやキリくあつちへうせ

やがれ』

とう鎌七は獺癩玉を破裂さしました、官女達はこの一喝に銚子盃を置き放しに奥へ去つてしまひます。

へばいなく奥へ入にける、あたり見廻し長柄のてふし、

庭の千草にそゝぎかくれば、忽ちに毒氣は檜に立昇り

秋の木の葉ばらく、嵐にちらす如くなり。

自分にすゝめられた銚子の酒を庭の草花へそゝぎかけると、花も葉もしほれてしまひました

『ム、最前の鎗といひ、今又流れし酒と云ひ、ハテきつい用心ぢやな。』

セ、ラ笑ふ時、玄蕃、彌藤次の二人は仰山にも弓矢で身を固めて君のお召したと鎌七を伴ふて奥へ入ります。

へされば戀する身ぞつらや、出るにも入るにも忍ぶぐさ、露ふみ分けて橋姫、すごく歸る對の屋の障子に

ハツシと打つぶて

礫の音を聞いてそりやお歸りの知らせぞと官女達が騒ぎながら出迎へます。

戀にやつれた入鹿の愛娘、橋姫がしほくと戻つて來ました官女達は撫さすりするやうな、いたわりやうです、ふと袖からんだ糸を見つけた官女は、それを手繰りました、

へたぐりたぐれば、くるくると、糸による身は笹がにの雲井の庭に引かれ來る、主は床かじき、

官女達の手繰る糸に引かれて花道から水際立つた、紫織物地模様様の着附けに一段と映ゆる優男、園原求女が出て來ます官女達の騒ぎは又一しほで

『イヤ手前はつい道がかりのもの、此の小田卷を拾ひ上げるやいな、滅多に引かれ參つたもの、何にも存ぜぬ、おゆるしなされて下さりませ』

と戻らうとするのを、大切な姫の戀人無理にとめて官女達は氣を利かしてお次ぎへと立つて行きました。

『此の御所の娘に極れば問ふに及ばぬ、入鹿が妹橘姫殿』
『入鹿が妹と若し御存じあらば、よもやお情も有るまいと女心に包み隠せしかひものふ、御存知あるお前様は、藤原の淡海様。』

二寸は互に敵と敵、求女は、我名を知られては助けて置けぬと刀に手をかけました、橘姫は生きてゐるほど思ひの種、お手にかゝるがせめての本望と

『南無阿彌陀佛』

覺悟の橘姫の心底を見て求女は自分と夫婦に成りたくば、入鹿が奪ひ取つてゐる、十至の御劍を入鹿の手から奪ひ返して渡せと、いふのです、橘姫は今夜の舞樂に事よせ、寶劍を奪ひ返して差上げませうが、若し見つけられ殺されるやうな事があつては、是がお顔の見納め、たとへ死んでも夫婦ぢやとおつしやつて下さりませ、と堅い決心が見えます、求女もその心に感じて盡味來までと約束をします。

『抱きしめたるおし鳥のつがひし詞、縁の綱引別れてぞ橘姫は奥へ、求女は吉左右を待つ心で下手の柴垣へ忍びます』
『忍ばるゝ、迷ひはづれし、かたかづら、草のなびくをしるべにて、いきせきおみわは走り來る。』

糸のぢれた小田卷を持つて、裾もあらはにおみわが走つて來ます

『エ、此の小田卷めが切れくさつたばかりで、大事のごを道からとんと見失ふた、さりながら爰より外に家はなしと本舞臺へ來て訪ひます』

へとひたやと、見やる向ふへお端したが、かつぎまぶかに、しやなくと豆腐箱さげあゆみ來る

上手から豆腐の御用が出て來たので、おみわは求女が來てはせぬかと尋ねます、豆腐の御用はしたり顔で、御姫様とその男が今宵内祝言があるとひとりしやべりまわして出て行つてしまひました、おみわは氣もそぞろ

『心も空、登る階段長廊下、往きかふ女中が見とがめて一人止まれば二人立ち三人四人いつの間に友呼ぶ千鳥むらくと、爰かしこから寄りたかり、なぶつてやらうと目引袖引き』

官女達が大勢出て來て、連も及ばぬ戀争ひ叶はぬ事ぢやと、さんへにおみわを小づき廻して奥へ入りました。

『局々は入る後に、前後正體泣きたほれ、暫しきへ入る』

思ひなり

獨吟 泥水にかけうつす、姿うつろふ水鏡、その心は行
きあはぬ

おみわは氣を取り直して起き上りました、口惜い此の上は、
寢太郎を呼んで来て仕返しをせしやう

獨吟 仇にくらせし月日の程も、云はず思ひの涙の雨に、
いとぐちな、四ツの袖

おみわは花道へかゝると

『三國一じや筆取りすました、おしやしやんくしやん
お目出度う。』

此の聲を聞いておみわは屹と立直りました、つかくと戻つて来た豆腐の御用をつきのけてかけ入らうします、處へ鱧七がぬつと現はれておみわの脇腹へぐつと差し通した氷の刃、おみわは姫の云ひつけで殺さうとするのか恨みはこつちにあると、生き變り死に變り此の恨みを晴らさでおかふか

『思ひ知れやと輿の方睨みつめたる眼尻も、さげぶこは
ねもうわがれて、さもいまはしき其の有様』

それをじろりと見て鱧七は汝が命捨てた故思ふ方の手柄になつて入鹿を亡ぼす事が出来たのだと大きく云ひます。そうして入鹿は白の牝鹿の生血を母が飲んで出生した故に、爪黒の鹿の血汐と疑着の相ある女の生血を混じて笛にそゝぎ調べるときは自然と鹿の性質現れる其の虚をはかつて寶劍を奪ひ返

す鎌足の計略、疑着の相ある汝故不憚ながら手にかけたと、
笛の穴へたばしる血汐をそゝぎます

『今こそ揃ふこの幻術、此の笛こそは入鹿をひしぐ責道具
ならんハハハ、』

『有難やと押し頂き勇み立つたる其のしつがら、實に藤
原の御内にて、金輪五郎今國と、きたいにきたいし忠
臣なり、』

おみわは様子を聞いて下賤の身が、貴い人と語つた事がし
じみと冥がに感じるのでした、

『枕かはした身の果報もの、あなたのお偽となる事なら
死んでも嬉しい忝い、とは云ふものゝ今一度どうぞ
お顔が拜みたい、たとへ此世の縁は薄くとも未来は添
ふて玉はれと、はい廻る手に小田巻の此の主様には逢
はれぬか、』

『モウ目が見えぬなつかしや。』

『戀しくくと云ひ死に思ひの玉の糸きれし、今の世に小
田巻塚と鳴りひびいたる横笛堂の因縁かくと哀れなり
おみわは小田巻を抱いて落ち入りました。』

此處へ玄蕃、彌藤次等が家臣を引きつれて、鱧七に掛り立廻りあつてよろしく江戸見得になります。

(幕)



中座五月興行上演

開化夢見草

全二幕一場

岡辰押切り帳より

本 脚

田 中 總 一 郎

主なる役割

伊丹屋重助	實川 延若
番頭 鶴松	嵐 吉三郎
前川 八郎	澤村田之助
武田源之丞	市川九團次
村上 靜六	中村 鴈正
岡野 主馬	實川八百藏
杵屋小さん	中村 魁車
宮戸川兼八	市川箱登羅

時 明治二年頃の晩春

舞台暗黒。

散財癖子がやかましく聞えて来る。

やがて、靜かに照らしだされる光圓の中に、

重助と小さんと兼八がみえる。

小さん (つんとすましかへつてゐる)

重助 (手持無沙汰にしてゐる)

兼八 (双方の仲に入つて困つてゐる) ねえ小さん姐さ

ん、少しは機嫌を直して、笑顔の二ツもおみせ下す

つちやどんなものでせうね。

重助 おい、小さん、いつまで待てば、返事をして貰へる

のだ。わしも伊丹屋の重助だ。こゝまで來れば後へ

はひかぬ。いやか、應かはつきりときかしてくれ。

小さん

……

兼八

姐さん、旦那は、眞面目におつしやつてるんでせ
洒落や冗談ときいちゃ、罰があたりますよ。

小さん

……

重助

くだい様だが、なあ小さん、この重助は、生れて始
めて女に惚た。物心ついでこの方、四十に近いこの
おれが、女を知らず、戀を知らず、金物木物と笑は
れながら、自分一人は、稼業熱心商賣第一と、脇目
もふらずにやつて来たが、ふとした縁でお前と逢つ
てからと言ふものは、心の駒はとう／＼狂ふた。何
でも彼でん金を儲けて、天晴れ日本一の商人になら
うと思つたおれの心は、たはいもなくお前にそれた
お前の爲めにや商賣も忘れがちな今日此頃。その心
根を不憫と思つて、うんと言つて貰ひたいのだ。

小さん

旦那、どこでお習ひか知りませんが、大そうあはれ
ツぼく持ちかけましたね。成程ね、そう言ふ口説き
方も一ツの手ですね。

兼八

姐さん。

小さん

何だね、兼八ツあん。お前さんなんぞの出る幕かね
黙つてひツこんでおいでな。あ、さうだ、これは、
大方、お前さんが軍師だね。

兼八

冗談言つちや困ります。あつしや何にも知らね
えのさ。

重助

いや、小さん、それはお前の思ひすごしと云ふもの
だ。まだこの道にはかけだしたが、人手を借て惚は
せぬ。

小さん

ええ、もうその手は古ふござんす。ききあきており
ますよ。もし、伊丹屋の旦那、世の中は文明開化だ
とか言つてるぢやありませんか。ちつとは、新手の
口説がおきき申したいものでござんすね。白ぼく
れて初心らしく持ちかけようたツて、うつかりその
手にのりやしませんのさ。——旦那は、みかけに上
らない卑怯なお人ですね。

重助

なに、わしが卑怯だ。

小さん

ええ。卑怯だらうぢやありませんか。十九や二十の
色氣づいた年頃ぢやあるまいし、齒のうく様な惚た
はれたは、氣障といふものでござんす。——當時こ
の横濱で、異人相手の商賣を手廣くなすつてゐらつ
しやる伊丹屋の旦那ともあらうお方が、そんな事
をおつしやつたつて誰がほんとにするのですか。そ
れで女がだませると思つてゐらつしやるのなら大し
た間違ひでござんす。——ねえ、旦那、昔と違つて

御一新この方は、お客も藝者も變りました、昔ながらの意氣やはりは、持ち合はさなないぢやありませんが、御當節は、それぢや駄目。何の役にもたちませんのさ。——御近附になつたおしるしにいゝ事を教えて進ませうか。これからの藝者をくどかうとか思ひなら、惚たはれたはこの次として、先づ大政官のお札で相手の顔をなでることです。ね。そいつが一番早路でせうよ。

重助 —— 小さん

小さん えッ。

重助 いゝことを教へてくれた。如何にもお前の言ふ通り大政官のお札で、お前の顔をなでるがどうだ。

小さん えッ。妾の

重助 お前も藝者の一人だらう。美事をいつをはね返すか小さん（嘲笑して）さアね、物はためしだ、やつてごらんなさいまし。

重助 なんと。——よし。（財布を出す）

小さん あ、待つて下さい。

重助 なんだ。

小さん 憚り乍ら、これでも、杵屋の小さんでござんす。五十や百の端下金でこの顔をなでられちや、産湯をつ

かつた玉川上水の汚れになりますから、お断り申しますよ。

重助

どこまで口のへらない奴だ。よしかうなりや男の意地づく、伊丹屋の身代ありツたけを、大政官のお札にとりかへて、貴様の面に叩きつけてくれるぞ。

小さん

その度胸がおありなら、いつでもお目にかゝりませう。だがね、旦那、五千兩にかけたお札なら、無駄でござんすよ。

重助

なに五千兩。

小さん

びつくりなさるにや當りません。一萬兩の半分でさ

兼八

姐さん 黙つておいで、兼の字。

兼八

だつて、姐さん、お前さんの様な無茶を言つちや

小さん

いいんだよ。

重助

——うむ。五千兩。びた一文もかけはせぬ。兼八、お前がこの場の證人だ。明日の夜、小さんをつれて店まで来てくれ。小さん逃げるな。

小さん

逃げかくれはいたしません。必ず、お店へ伺ひませう。

重助

よし、面白い。——（手しやくでのもうとする）

小さん

たとへ敵同志にならうとも、お酌位は致します、（

瓶子をとつてつく。

重助 (靜かにのむ)

小さん (相手の冷靜さに、やや心を惹かれてゐる)

兼八 (あつげに取られて、二人を見くらべてゐる)

次第に暗くなつて、最初の暗黒にかへる。暫らくして、明るくなる、伊丹屋の店である、

x x

表に近い土間で、番頭の鶴松が二人づれの異人を相手に、手真似で雜貨を賣つてゐる。小僧の幸吉は、品物を出したり、ならべたりしてゐる。

奥の間の金庫の前で重助が、札束と算盤とを前において居眠つてゐる。

外を通行人が通る。

遠くで支那胡弓が聞える。

異人達は買物をして、幾枚かの札を渡して出て行く。

鶴松

——(重助の側へ来て) 旦那、旦那。おや、いゝ心持そうに寝んでおいでなさい。あツいけない、大枚のお金を前において居眠りとは物騒だ、旦那、旦那

(ゆり起す)

重助

(眼をさます) 旦那、お眼がさめましたか。

重助

おゝ、鶴松か。ついつかりと居眠つてたらしいが

鶴松

實は、昨夜まんじりともしなかつた上、今日は朝からかけづり廻つたせいにか、集めた金の勘定をしてゐる中に思ひ通りの金が集まつたと思ふと一時に心がゆるんだらしい。

左様でございますか。私は、まだどこか御氣分でもお悪いのではないかと、案じて居りました。——あ旦那様、只今フランス五十三番のデパンさんの所から生絲の註文がありました、ついでに瀬戸の火鉢を十個程買ひたいからと言つて、手附をおいて行きました。

重助

そうか。それは御苦勞、御苦勞。——今夜は、もう休むがいゝ。

鶴松

旦那様。何だね。

重助

つかんことをお伺ひいたしますが、昨夜から今日へかけての御様子は、何となく氣にかゝつて居ります故、もしも、お差聞へのないこととございましたな

とこの鶴松へもお聞かせ下さりませぬか。

重助

いや、別に案じてくれる程のことではない。一寸、入用があつて、大政官の大札で五千兩と言ふ金を、今夜のうちにこしらへねば、この重助の男が立たぬ

仔細があつた。だがそれも、どうやらととのふた故
もう、何も案じてくれることはない。——鶴松や、
ここへあるのが五千兩ぢや。これを、金庫へ納つて
下され。

鶴松 はい。畏まりました（金庫へ入れる）。

重助 これ、幸吉や。

幸吉 （居眠つてゐたがびつくりして）へえ。

重助 もう、戸を下して先へやすむがよい。締りは、わし
が後でする。

幸吉 へえ。（戸を下ろす）

鶴松 （金庫の合鍵を合して、扉をしめようとしてゐる）

下ろした大戸のくぐりが、がらりとあく

前川 （黒紋付の上へ白褌、小脇に重さうな包をかかへ、
右手に白刃をさげてゐる）——御免。

幸吉 あッ。——（腰をぬかす）

前川 ——御當家の御主人とおみうけ申す。拙者儀、押借

ではござらぬ。物取りでもござらぬ。突然ではござ
るが、この身を暫時おかくまひ下され。

重助 えつ。

前川 仔細は後刻申し上げる。拙者は、只今野毛山不動の

境内にて、亡父の仇を討ち果して参りしもの、かく
の通り、みんごと敵の首級はあげたれど、中途より

して、敵方に、思はぬ助太刀現れて殊の外難儀いた
す。たとへ如何程の助勢来やうとも、斬つて斬つて

斬りまくり、力のかぎり根かぎり戦ふ覺悟はござれ
ども、せめて、本懐とげしこの首級を、亡父が墓前

に供へたく、心ならずも其場より、こゝまで落のび
て参つたもの、長い間とは申さぬ、拙者を追ひまは

すものどもをやりすごす僅の間、何處へなりともお
匿ひ下され、お願ひ申す、お絶り申す——おお、人

聲がいたす。足音がきこえて参つた、御主人、御主
人、武士がこの通り、両手をついてお頼み申す

重助 はい、はい、では、ともあれ、何處へなりとお忍び
なされませ

前川 かたじけない、御免（半開きの金庫の中へ入る）

重助 あつ、（とめようとしたが、もう間に合はないので
思ひ切つて、金庫の表扉をしめる）

武田が、村上和岡野をつれて、とびこんで來
る、

武田 只今これへ、怪しき侍が参つたであらう。何處へ
匿つた。

重助 (平靜に) えつ、手前共へは、どなたもお越しにはなりませぬが、お角違ひではござりませぬか。

武田 うそをつけ、かくし立てをいたすと爲にならぬぞ。

重助 いえ、決して、かくし立てなんぞはいたしません。

私は、御覽の通り、只今、帖合をいたして居りました所で、へえ

村上 こやつ、仲々大膽不敵、拙者等は只今、野毛山から

追つつめ、槌に當家へとびこんだのをみ定めて參つたのぢや、町人の分際で、なまじいな俵氣をみせて怪我するな、

重助 全くもちまして、左様なうそいつはりは申しませぬ

うろんと思召すなら、どこなりとお探し下さりませ

岡野 武田氏、こやつ、一筋縄では参りますまい、縛りあげて

武田 いや、待たれい、我等の目的は、八郎を捜し出せば

よいのだ、御兩所、屋捜しをなされい、これや主人

もしも、我々が捜し出せば、貴様の首は、胴から離れるぞ、よいか、

重助 はい、

武田 それ、各々、

村上、岡野奥へふんごむ、

鶴松 …… 武田は、表戸のしまりて、突立つてゐる

重助 (何と思つたか、金庫の前に座つて、算盤帖面をとつて、何かしきりに勘定をしだす)

鶴松 旦那様、

重助 これ、鶴松、そなた、何をぼんやりしてゐるのぢや

今日の帖がまだできて居らぬ、さ、早ふせ、早ふせ何、何、もうできて居る、どこにぢや、うむ、そう

か、よし、よし、ではと、これへちやんと、座りなさい、今夜は昨夜のつゞきの生糸の講釋ぢや—あ

もし、お武家様、手前共では、今は丁度取引のござりました帖縮の日でござりますので、何のお構ひも

できません、御無禮の段、平に御容赦下さりませ、これ、孝吉や、何をぼんやりいたして居るのぢや、

早う、お茶でも入れて進ぜぬか。

幸吉入る

村上、岡野出てくる。

村上 どうも不思議ぢや、

岡野 たしかにこゝへ入つた筈ぢやがな

武田 見あたらぬか

村上 ひよつとしたら、我等の思ひ違ひかも知れぬ、この

向ふの横町を右へ切れた人影があつたやうぢや、

岡野 それでは、そいつを追つかけやう

武田 臺所、物置、二階、押入、——見落しはござるまい

な、

二人 はつ確に、

武田 御兩所、それなる鐵の扉の押入があやしむぞ、

重助 はい、はい、これは、金庫でございます、手前共で

は、一番大切な所、めつたに人にのぞかせることさ

へいたしませぬが、おうたがひ遊ばすから、只今、

あけてお目にかけます、はい、丁度、この帳簿も

仕舞はねばなりません故、鍵をあけて御覽に入れま

すこれ幸吉や、奥から金庫の鍵を持つて來な、——

これ鶴松、昨夜のつゞきの話をして進ぜる程に、ち

やんと控ておきなさい——お侍様、只今番頭に二

筆三筆認めさす間、お猶豫願ひます。○（侍達に

煙草をすゝめる）さて、鶴松、よいか、生絲の賣込

をするのに、荷主と輸出商の間でとり持つ値段の割

見當だ、覚えておけ、生絲の取引は總て百斤建て、

百斤と云へば十六貫、十六貫の値段は、米四十七石

の値段とつかず離れずと云ふことだ、一石に三兩二

分の米なら生糸百斤百四十兩と見當をつければよい

尤も海外の事情や、繭の不作と言ふやうな特別の事

情のある時は、そうばかりは行かんが、平時なら、

生糸百斤米四十石とな、判つたか違つた所で一割か

二割、そこは商賣の呼吸でな、よいか——これ、こ

れ幸吉、何をしてゐるのだ、早く鍵を持つて來ない

か、お侍様に待つて頂いてゐるのだぞ、——はい

はい、お侍遠でござります、はい、只今、直にあげ

て御覽に入れます——そこで、鶴松よく聞けよ、

武田 これ、これ、何を申す、如何に商賣熱心なればとて

それしきのことを、火急の場合に談合いたして居る

奴があるか、たいがいいたせ、

武田氏、この落つき方を見ると、よも偽りではござ

るまい。大分夜も更けて參つた。かう言ふ中にも心

がせく、他所を尋ねやうではござりませぬか

いかさまのう、拙者も、先程より、じつと様子をみ

てゐるが一舉一動不審はない——大方我等の角違ひ

でござらうよ、——參らう——赦せ

三人出て行く

重助はほつとする、

鶴松も蘇生した思ひである、

重助 やれ、やれ、骨の折れることぢや、それにつけても

金庫の中のお侍様は、さだめし息づまつて苦しい

ことであらう、どれ、開けて上げませう。(合符を廻して、表扉を左右にあげ、中扉の鍵を外してもうしお侍様、あなた様を追い廻す侍共はもう歸りました。御安心なされませ、さぞおつかれでござりませう)

前川

(出て来て、刀を鞘へ納めて)これは、並々なしぬ御親切、拙者重々お禮申す、彼等如きの五人三人、物の數とも存ぜぬが、これなる敵の首級を、亡父が墓前に供えずば、死ぬにも死ねぬこの身の因果、よくぞお匿ひ下された、いづれ改めてお禮に参上いたす、

重助

一刻も早くお立ちなされませ、今の奴がまた引かへして参りますと、事面倒でござります

前川

御芳志千萬忝ない、御恩の程は、生涯忘却は仕らぬ、さらばでござる——お、お、だいぶ夜も更けた戸締り、火の用心、お忘れあるな、御免氣をつけてお行きなされませ、

重助

前川去る、

重助

——思ひもかけぬ人助けをしたものぢや、これも何かの功德にならう

鶴松

左様でございますな、それでも私はもうびつくりい

たしまして、生きた心はござりませんでした、それに引かへ旦那様は、何といふま心強い

重助

(金庫の前で、べつたり尻持をつく)あつ

鶴松

えつ——(かけよつて)あつ

重助

——首ぢや、首ぢや、女の首ぢや、あつ、金が、金が、五千兩の札がない

鶴松

えつ

重助

——しまつた、今のはかたりか、畜生(かけ出さうとする)

兼八

——え、今晚は、あ、痛え、

重助

——誰だ

兼八

へえ、兼八で、おや旦那、どうしました、顔色をかえて、へー、へー、お約束通り、小さんを連れて参りました、

重助

——あつ

小さん

今晚は

重助

——うむ(仕方なしに座敷へ上る)

小さん

兼八つとく

重助

鶴松、お客様にお茶をあげろ

鶴松

へえ(入る)

小さん 旦那、お約束通り参りました

重助 ……

小さん 立會人の兼さんも、ちやんとこゝに控て居りますよ

兼八 — 旦那、ひようたんから駒がでた様な騒ぎであつしや、これでも人知れず心配しやした、ならうことなら話はまるく納めたらうがすね

重助 ……

兼八 旦那

重助 (兩手をつく)

兼八 旦那、何ですぬ、そんな真似をなすつて

重助 すまない、この通り、この通り謝まらう

小さん え、何ですつて

重助 あれ程はつきり大口を叩いた約束を外しちや、わしはどうでも謝らなければなるまいよ——譯はあるんだ、言へや愚痴にならうから言ひたくないが、わしだつて、まさかに、昨夜の話を忘れる程の年ぢやない、實を言へや、お前とあ言ひ争つたわしの心はもう、色氣を離れた意地づくだつた、五千兩の札束をお前の顔に叩つつけや、こつちの胸はすつとすくたゞそれだけの望みから今日は朝から手を廻して、金はたしかに集まつた、その札束をあの金庫へ入れ

て、さあ、いつでも來やがれと、手ぐすね引いて待つてゐる所へ、降つて湧いた災難だ、言譯ぢやない嘘ぢやない、四人組の侍のかたりにあつて五千兩の札束は女の生首と早變りをしてしまつたのだ、みなせえ、首は、それ、そこにある

兼八 — きあつ

小さん あれ

重助 小さんさん、今日の勝負は、わしが敗けた、だからもう、これつきり、愚痴は言はない、言譯もよそう只一つ、もう一度、はつきりと約束をしてくれないか、昨日にも言ひたいが、そんな身代の伊丹屋ぢやない、半年先の今日の日に、きつと五千兩はととのへてお前の顔に叩きつけやうから、もう一度、逃すにでむいて欲しい。

兼八 旦那、

小さん ……

重助 片意地な男だと笑つてくれ

小さん 旦那

重助 なんだ

小さん 勝負はやつぱり、妾の負でした、

重助 えつ、

小さん ここまで来たのは女の意地、若も五千兩の札束で、

この顔をなでられてゐたならば、金に轉んだと言はれるのはくやしいから、死んでも旦那の腕には抱かれませんが、今の旦那のお心をきいちゃ、こつちが謝まりました、御迷惑はしりませんが、妾の方から旦那の腕へとびこませて下さいまし、五千兩よりも尊い人の心に轉びますのさ、

重助 え、

小さん 半年先にやつて来ずともたつた今から押かけ女房、

兼八さん、妾や、もうこゝから歸りやしないよ、

兼八 えッ、こいつあ、えれえことになりやがつた

小さん あなた

重助 小さん

小さん — お京と呼んでおくんなさい

重助 お京、お京

小さん 嬉しい

重助 — 兼八

兼八 へえ、

重助 (財布をなげやつて) それ、仲人御苦勞、もう夜

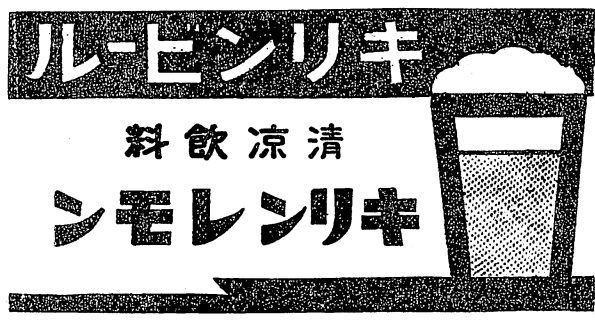
は更けたぞ。

兼八 へえ、(そつとくどりから出て行く)

重助 は、い、い、
小さん (共に笑ふ)

鶴松がお茶を運んで来て、二人の寄り添つた様子をみて、不思議そうな顔をしてみる

(幕)





道頓堀

出演の挨拶に替へ

八代目 澤村 訥子

先年港劇場には私の一座で出演いたしましたる事もございますので大阪は見ず知らずの土地といふ譯でもございませぬが道頓堀へ参りますのはこの度が初めてでござひますので、萬事皆様の御高庇にお絶りするより外はございませぬ

殊に此の度は、訥子襲名披露を致させて頂きますので、身に餘る光榮を、何と御禮申しあげましたらよいのやら、唯々皆様の御高配の程を深く感謝して居る次第でございます、

この上は一生懸命の舞臺を勤めまして、いさゝかたりとも皆様の御

所作事

旅路の花聲

〽落人の見るかや野邊の若草の、すき尾花はなけれども、世を忍び路や旅衣、きつ、なれにし振袖も

〽所から知れる人目をば隠れど色香梅ケ花、散りても跡の花の中、いつか故郷へかへる雁、まだはだ寒き春風に、柳の都跡に見て、氣も戸塚かわさ吉田橋、すみねの筆に夜るの富士、よそめに之れさかけ暗き、馬のれぐらなたざり來るト、能き時分にあをちあげる

〽おかる勘平、旅なりにて立つて居る

勘平 鎌倉を田てやうく、爰は戸塚の山中、石高道で足は痛みはせぬかや
おかる 何のこれよりまだ行先が思はれて
勘平 そふであらふ、然も晝は人目も憚るゆい
か 幸い爰の松影で
勘平 暫しの内は足休め
か ほんにそれがよいわいな

〽何も譯なき浮き晴し、浮が中にも旅のそら、初時鳥明け近く、色で逢ひしは昨日今日、かない屋敷の奉公、アノ奥様のおつかいが、二人りが鹽谷の御家來で其の悪縁が白猿に、よう似た顔の錦書が
〽こんなわにしが唐紙の、おしのつ

厚情にお酬ひする決心でござひます

× × × × × × × ×

先代（訥子）も兄（宗之助）も既に皆様とはお馴染にて、大阪へも

度々出演ましてござひますが、私は初めてで、此の度も兄や先代とは

随分深い親交を頂いて居ました成駒家さん始め皆様の御手引を得まし

て、襲名披露をさせて頂く事になつたのです。

× × × × × × × ×

就きましたは、先代、及び兄同様の御指示御聲援の程をひたすらま

願ひする次第でござひます

× × × × × × × ×

道頓堀初出演に對し何か是非感想をと、道頓堀編輯者の御命令を頂

きました、大阪乗込みを間近に控えまして何かと多忙を極めて居ま

したので、落ちついて感想など認める餘暇も得ませず甚だ不本意なが

らほんの御挨拶替りにお禮とお願ひをかねて御返事までに



かひのたのしみに泊り／＼のはたごやで、ほんの旅寝の假り枕、嬉しい仲ぢやないかいな

そら定めなき花曇り、暗き此の身のくり言は、戀に心を、奪はれて

お家の大事と聞いた時、おきも此の身の罪科と、かこち涙に目もうるむ

勘平

ト いろ／＼あつて

よく／＼思へば跡先のわきまへなく爰まで来たれども、主君の大事を餘所にして、此の勘平はさても生き

てはゐられぬ身の上、そなたは云はゞ女子の事、跡にながらへ、我なき跡をさふてたも

ト 腹切かける
おかるこめて

か

あれまた、其様な事いぢやんと私し故にお身の不忠、それがすまぬと死なしやんとしたら、私も死ぬる其時は、アレ二人心中ぢや誰がお前を

ほめますぞへ、サ爰の道理を聞分けて一と先づ私が在所へ来て下さんせ

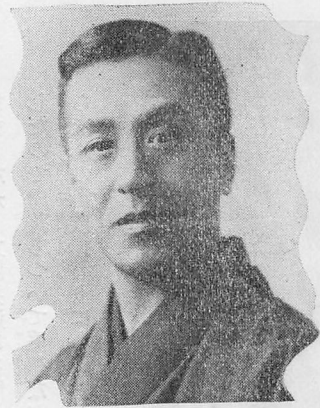
さ、さんもか、さんも、それは／＼たのもしいお方、もうかうなつたら

因果ちやこあきらめて女房の云ふ事も、ちつこは聞いてくれたがよいわ

いなア

それ其時のうるたへ者には誰がした、みんな私が心から死ぬる其身

なながらへて



雜 感 一 把

澤 村 宗 十 郎

雜誌『道頓堀』五月號に感想をとの御注文ですが

久々の大阪乗込みの事で、色々お話しもございしますが、さてとなると、相變らずの前夜不揃ひで、何處が頭やら何處が尻尾やらつゞまりのつかないものになりますので、固苦しい御挨拶は失禮させて戴きほんの思ひ出のまゝを書き連ねさせていただきます。

御承知の通り昨年も二月三月に引續き中座で皆様にお目にかゝり、大變な御評判を頂戴いたしました。其處で本年も二月には是非といふ約束でございしましたが、帝劇二月興行の残り番を勤めましたので、其意を得ませず、漸く五月にお目

見得出来る事になり、取り分け序の妹背の御殿では、お三輪を遣らせて頂く事も誠に結構でござりますが、少し古くはありますまいかと、實は前以て御相談申あげましたが、林さん（鴈治郎）求女に出られ、天星（延若）さんが鱧七といふ様な顔ゆえ是非との事で本極りと云ふ様な譯で何と申しましたも、少々娘にはトウの立つて居る年輩を忍んで御ヒイキ目に御覽下さる様お願ひいたします。また喜利に据りました明烏の時次郎も餘り舞臺の上で活動致しません役では在りますが只すこしの若やいだ所をお目にかけるのと新内には賀太夫が久々の上阪で、高砂屋さんが十分皆様に御満足を與へられる事で在らうと思ひます。それに此度は一家族の訥子が襲名後



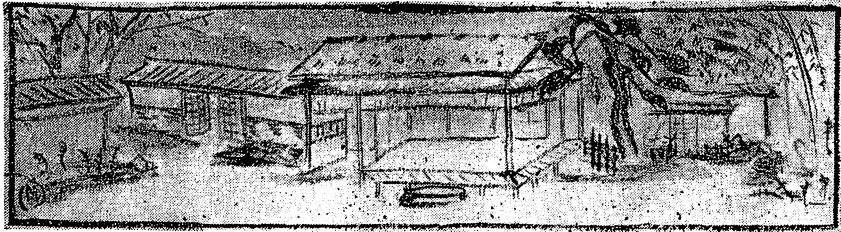
初めての披露が在りますので成駒屋氏と私が連なつて口上があるとか申す事で素顔の水々しい處を——鳥渡は何うか判りませんが、兎に角御挨拶致す事に成つて居ります。私は何れとしても大阪は第二の故郷で参る度にいつも愉快に芝居して歸りますが今から待ち焦れる様な氣持で現に三人の子供が残り番と上阪に加はるので大にもめました様なわけで、年上の高助が納まつて歌舞伎に残つてくれましたので漸くまとまりが付き、震災後約一と昔振り久々御目見得の田之助と三番目の弟、訥升を同伴致して参る運びにいたしました、訥升について鳥渡お話しが御座りますと申すのは實は源平時代から母を失ひ私が一人で育てた様な子供で在るので格別愛して居りました所が、ツイ一ヶ月程前、東京の大谷社長が御仲介で

何でも市川左團次の所へ養子に遣る事にしては何うかと種々御心配に預かり且御注意もありましたので、私も何日迄鬼子母神の様に子供ばかり抱へて晩年迄苦勞を致すのも智恵の無い事と獅子の子落しを決心致しまして、愈々本年の秋には高橋家へ遣はし襲名且相續の披露が在る譯なので御座います。夫故先づ私同伴の澤村訥升としての御目通りは今回が最終と申す譯で先年中座にて改名披露の節、皆様の御厄介に成り當五月に御挨拶旁々引連、間もなく秋には改名と云ふ様な中々多忙な次第で何うか此後共お見捨無く等と少々脱線して口上く調に成つて参りましたから、お話しも此位の所で切り揚げませう、只々世間の景氣に拘らず、昨年にも倍した興行の成功を御關係者御一同と共に祈つて居る次第で御座います。

暹羅

船 (三幕)

林喜美雄



唐津屋店の場——右團次の爲頭平兵衛が帳場に坐つて帖合をしてゐる店先には駄馬をつなぎ、馬子と店の者が、今卸したばかりの俵を奥へ運んでゐる。

ひとわたりの取引が濟むと馬子は判取をすませて歸つて行く、あとには平兵衛が丁稚小者に云ひつけて、邊りを掃除させる。

『さあ〜早ふ仕舞はう、先代と違ふて新旦那はむづかしいぞ』
誰かと思はず口走る、帳場の平兵衛の眼が、叱責する様に光る、其處へ奥から當主の治右衛門(市藏)が

出て来る。

『住徳丸は何時うけるのであつたな、』

『明朝の手筈で、もう荷役萬端がすみましてござります、斯うした簡単な商賣上の問題が、ほんの一言二言あつて、時に平兵衛——治右衛門は嫌に改まつた。』

『私は先代と違ふて生ぬるい人遣ひは大嫌ひぢやによつて働く時には火の出るほど働き、遊ばす時は思ふさま遊ばせる積りぢやが……』

つまりよく働け!よく遊べ!といふわけだが、兎角店の者達の頭には、先代の慈悲がこびりついて脱かないものと見え、何うかすると、先代禮讃の聲がチヨ〜當主治右衛門の耳に入るのだ、得てしてよく働けといふ主人に、よく其の使用人を遊ばす人は、歎い世の中だ、殊に、理由はともかく、押かけ婚と出かける位は朝飯前の當主治右衛門だもの、どう



も言ふ事とする事が一致しないらしい
「それは旦那様の思ひ違ひでございます
ります……」爲頭平兵衛はさすが
に苦勞人だ、

「一時危ふござりましたお家の身
代がこう繁昌に持ち直りましたの
も皆旦那様のお蔭でござりますも
の、誰一人旦那様を有難う思はぬ
ものはござりませぬ」

兎角の話のうちに醫者豊住半齋が
来て——簾蔭の袖が黄ばみ出すと、
醫者の顔は青くなるばかり……だ
ど病家戻りの道草らしく、冗談の最
中、おちせ(魁車)吉十郎(訥子)
が慕參歸りの體で出て来る。

「吉十郎そなたも一緒に南宗寺に
泊つたのか、」

治右衛門は人前でおちせが先夫墓
參りをするのをとがめる事も出来な
いので、自分の連子の吉十郎にとが

める様にいふ、

その場の氣まづさを知つた半齋は、話談をお小夜の事に變
へる、吉十郎を嫌つて家を出たお小夜は尼になつてゐる、

「大方俺達に氣まづう思ふての事であらう」と治右衛門が
皮肉をいふのを

「お小夜が何しにその様な心を持ちませう、娘心の一團に
父の死を悲しんで、唯それだけの量見でござります」

おちせは母らしく娘をかばふ、親の威光でお小夜の出家を
思ひとどまらせてくれても上ささうなものだと吉十郎は不平
をいふがお小夜の氣持だけは親だとして、どうにもならぬもの
らしい。

ちせ「來月の父の一週忌に髪をおろすと申して居りまする
半齋」なるほど一週忌、來月十七日は先代武右衛門殿が亡
くなられた……」

話が先代の死といふ事に落ちて行くと、後暗い治右衛門は
「店先でげんでもない」と云ひながら話を外へそらせる。
半齋と吉十郎が退場すると、夫婦間には氣まづい没黙がつ

づく、しばらくの後、治右衛門はおちせがあまり佛いちりを
するのを、自分へ對してちと遠慮して貰ひたいといふ、この
唐津屋を再興したのは自分のお蔭ではないかと思ひにきせ序に
自分の願をふりきつて先代へといひで行つた昔の事まで厭味

をいふ

『どうぞその様な事は仰しやらずに下さりませ、何はともあれ今はこうした女夫仲、お前の氣に染まぬ事は慎みます様屹と心をつけませうほどに……』

涙をこらへて、どこまでもつしまやかなおちせの態度に觀客の同情をひく。治右衛門が興へ去ると、内庭から番頭が出る。

平兵衛はちせをなぐさめ、二人が面をそむけて泣いてゐる時船頭が走つて出て俵の榮三郎の歸つた事を知らせる。しかも暹羅から珍しい荷物や金銀を澤山持つて歸つたといふので夢とばかり喜ぶが、おちせは自分の不貞を考へると身を切られる思ひがする、彼女は身もだえしながら内へ入る。

唐津屋の嫡子榮三郎、彼を助けた天竺徳兵衛、手代親七、お富士の一行に船頭店者大勢荷物を擔いで隨ひ、その後はこの異様なりをした人々を珍しげに町の人々がついて出る。

徳兵衛が無事に歸らるれば用のない體故失禮するといふのを榮三郎は無理に自分の家へ招じ入れる。

平兵衛をはじめ店の者達は久々の對面を喜ぶ、榮三郎は嬉しさをかくす事が出来ない。

然し榮三郎の嬉びは次第にどん底の悲哀と變つて行く、其處へ父として現れたのは、五年間夢にも忘れる事の出来な

つた武右衛門ではなくて、叔父の治右衛門であつた。

『親旦那には去年お亡くなり遊ばしたのでございます』

番頭平兵衛の言葉に彼は世界中が一時に眞暗になつた様な思ひに、男涙に咽ぶ、おちせのすゝり泣きが襖越しに漏れて来る。

南宗寺の場——榮三郎の妹お小夜が、吉十郎の執拗な戀慕を避け、一つには父の菩提を弔ふために世を捨て同様の有様で逃れ來て居るお寺だ。

榮三郎は理由を聞けば聞く程妹に一時も早く逢ひ度さに、寺を訪れたが、尼僧の良田たゞ一人で生憎妹は留守である。教えられるまゝに、父の位牌に回向する。その時、お小夜は佛門に入つたとは言へ未だ世にありし日の姿をそのまゝ、墓參の歸りらしく出て来る。

絶えて久しくなればまだしも、何うせこの世では逢へないものと決めて居た肉親の兄の姿を目の當り見たお小夜は、嬉しさをより悲しさより、唯先立つものは涙ばかりだつた。

榮三郎は、第一に妹に逢つて聞き度いのは父の臨終の模様だつた。然し、妹は、『何故母様に問ふては下さりませぬ』と早や目に持つ涙。

へ出家に云はれぬ切なさ、兄は心にきつとうなづき、



『そなたのいへぬその心が、私の胸にはよう聞えた、親父様の御最後は尋常ではよもあるまい』

兄がどうしてそれを……お小夜はびつくりした。兄が既にそれを氣附いて居れば、これ以上包む必要もなかつた。

妹はすべてを打ちあけた。父は現在の叔父（當主治右衛門）の所へ行つて、戻つた其夜から、激しい頭痛と眼まひが、そもゝ發病の因で、半齋の藥を吞ませたけれど、苦しみが増すばかりで更に利目がなく、口さへきけぬ悲しさから、唯形相すさまじくたつた二日の患ひで遂に永眠したので。そして、死後萬端の取なしも叔父がしたが、一週忌済まぬうちに僅の金を枷にして唐津屋一家を乗り取つたのである。

憎いは治右衛門、怨めしいは母様と榮三郎は、さすがに母の不甲斐な

さを怨むが、お小夜はそれを遮切り、あゝした事になつて以來泣きの涙で其の日を送る母は、唯家のためその身も心も犠牲にして居るのだと妹の言葉に榮三郎も今は責める勇氣もなく、身を置く眞の家もなく孤兒同然の身の上を歎くより外はない。

その時、下手から新七が出て来る。

お小夜は、それを見て、今までの悲しみもどこへやら、いそゝと新七の手をとるが、それもその筈五年間見づに合はづに戀焦れた新七だもの。

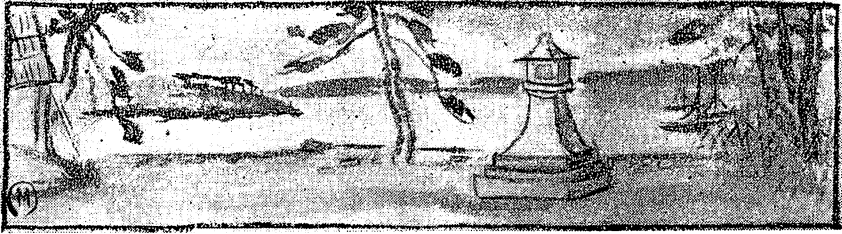
三人は又しても治右衛門の横暴や、亡き父や母への義理立て、孝と不孝の岐路に立ち迷ふ。榮三郎は思案を決めて立ち上る。

『兄さん何處へ』

『父ちゃんの墓へ詣る』

榮三郎は二人には必ず来るなど言ひ捨て唯一人、裏手の墓地へ——舞臺靜かに廻る。

墓所の場——累々たる卯塔、よき所に石の玉垣を繞らした古き墓所。その中に『秋月峨山無想居士』と記された墓標こそ武右衛門の墓標である。榮三郎は生たる人に云ふ如く、『お體こそ此墓標の土となられても、無念の魂魄は宇宙にとまつておいでなされやう、その御無念は命にかけてこ



の刀に敵の血汐を塗らいではおきませぬ」

無念の涙はらりと散るや血汐の紅葉ばも、一念凝りし心の色

榮三郎は刃を墓標に示して一念他

意なき様子。お小夜と新七が兄の様子を氣遣つて、潜りから現れたのも

知らない。

刃を空に翳して物凄しい笑顔、落葉しきりに飛ぶ。

戎島海岸の場——浪花津の外港として、昔から繁華を誇つた堺の港、

早や夕暗に閉されたけれど、船夫、商人、遊女などの往來もしげく、港

町の夜のさんざめきは、これから始

まるとでも思はれる程の賑ひ。

上手から唐津屋の女中おすみ提

灯をさげて出て来る、——つゞいて

醫者の半齋が、何處から来たのか、

尾行て来たのか、それとも其邊の木

かげにでも待ち設けてゐたのか行き

過ぎんとするおすみを呼び止めた。

おすみは、お家様が南宗寺へ碧巖録の提唱の聴聞に行つて

るので、その迎へに行く途中なのだ。

南宗寺には可愛い娘のお小夜も居る。然しそればかりでは

『では手附ぢや』

『確に貰ふた』

『その代りよいの』

『安心して、前祝でもして居さつしやれ』

斯うした會話が觀客の心持を、知らずの裡に引きしめる、何故か知ら不安な氣分が舞臺に満ちて、思ひなしか舞臺

一面に輝く青い月の光が物凄しい。

寄せては返す浪の音に和しとももの鏗た船唄のいくさりが、此の場の風景に相應しく聞える

榮三郎と新七が、向ふより今日の取り引の、上首尾な事を三郎の事である

その榮三郎なら、今日新七を連れて、大阪へ商ひに出かけてゐるのだ、然し、初夜までには必ず戻つて來ると番頭の平

兵衛の言葉をそのまゝおすみは半齋に語つた

それさへ聞けば半齋はおすみなどに用事はない

『道草喰はんと、早う迎ひに行かつしやれ、』

心易立てとは言いながら半齋の餘りの言葉におすみは、つ

ぶやきながら下手へ去る、

上手から浪人高坂嘉門が出て来る、半齋はそれと見て何か
囁く、嘉門は萬事呑み込み顔、半齋は紙入から某を出して
ない先夫武右衛門の菩提を弔ふ事が第一の目的は云ふまでも
ない、

『やつぱり心が残ると見える……』

何故か半齋はじつとなる、がおすみには勿論半齋の心持な
ど判らう筈はない、半齋はすぐ氣を替えて

『時に若旦那は……』

『相變らずお留守でござります、大方高須か乳守へ……』

その若旦那やない、高須や乳守に入り浸つて居るのは、
お小夜がお寺入りをしてから失戀の痛手に入り、やるせない胸の
悩みを、川竹の水に流さんとする吉十郎である、半齋が何心
なく訊ねながらも、きつと邊りに氣を配る程用心深く尋ねる
のは、話しながら出て来る

『新七、爰でゆつくり憩んで行かう』

不圖榮三郎は立ち止まつた、そして、ジツト月を見上げて
ゐる、

『こんな所でお憩みなされいでも、もう直にお家ではござ
りませぬか』

『私の家が何處にある……』

『……』

『牢獄にもまして居苦しい自分の家より、清らかな月光を
浴びて、馴染の深い溪の景色を眺め見廻す方が、何れ丈け今
の榮三郎にとつては幸福だつたか知れない

家のため、親兄弟のためにと、異國の空で五年の月日を、
あらゆる困苦と闘ひつゞけて、やつと千金を積んで歸つた我
家は、叔父とは言ひ乍ら人も同じに、本来から言へば嗣子
の榮三郎は食客同様、それは未だ我漫の出来る事だつたが何
時如何なる時でも敬慕して止まなかつたが、身も心も叔父の
ものになつて居る事は榮三郎の心をこの上なく淋しくする事
だつた、それと妹から、父の臨終の模様を聞いて以來榮三郎
は生れた家ながら、其處は、南洋の怖ろしい島や、熱い國よ
りもいとほしいものだつた。

彼を思ひ此を案じながら主従は慰めたり、慰められたりし
て居ると、おちせが、おすみに迎へられて下手から出て来る
榮三郎は、これぞいゝ機會と、おすみを先に返し、新七に
はも遠慮させて、父の最後の模様を、母の口から聞こうとし
たのだ

仇はちやんと判つて居る、然し、證據がなければ手が下さ
れない、唯一つの頼みは、母の口からその實相を聞く事だつ
た。

然し、母の應へはわけもなく榮三郎の期待を裏切つた、父の死は頓死同様の急病だつたから、そうした疑ひの起るのも無理はない

然し、おちせはその時身も心も顛倒して、勿論夫武右衛門の断末魔の様は夢現の裡に過ぎた事は當然である、それに當主治右衛門とて、根からの他人ではない

つまり、榮三郎に對して、そんな疑ひを起させるのも、言はゞ母自身が至らぬからだ……さう言はれて見ると、榮三郎にはすゝんで實相を究める氣力は愚か、却つて一家のために現在の生活様式を選んで、それに苦しめられてゐる母がよりいとしくなつて來た

心も、二つ、體も二つ欲しい……そうすれば母へも、父にも孝がつくせる、でない限りは

『え、もう何も申しませぬ、新七〜』

席を脱して居た新七を榮三郎は聲高らかに呼んだ、そして新七に伴はさせて、母を一足先に歸すと、彼は又しても青白い月の光のなかにじつと思ひに耽る、

船唄へ船を出しやらば、夜深に出しやれ帆影見るさへ氣に

かゝる

微かに聞える船唄が現在の榮三郎の心には、憶えられる哀調を刻む、その時、新在家まで治右衛門の使ひに遣られたお

富士が出て來る、暹羅征伐の大志も半至らずして倒れた勘平の愛娘として生れた富士も、現在は治右衛門の下婢として、水仕事はいふまでもなく、其の邊の使ひ歩きまはして居るのだ然し彼女にとつては、榮三郎と同じ家に起き臥しする樂みに比べれば、そんな苦痛はなんでもなかつたのだ

然し榮三郎には、そうした富士女のけなげな心根が一しほいちらしく、引いては自分の不甲斐なさが我乍ら口惜しかつた、

だが、お富士の親御に誓つた約束は決して反古にはしませぬぞーと榮三郎の力ある言葉に、お富士は『お嬉しうございますー』と取り絶つた。

その時、バラ〜と上手からも下手からも浪人らしき男が二人出て來ると、狂散臭さうに二人を視守つた。

無氣味な人々の視線を避けて戀の二人は去らんとすると、上手から高坂嘉門が出て來て二人に突き當ると

『氣をつけぬか、無禮者ツ、』と言ひも敢ず、一刀抜き打ちに切つてかゝつた。

商人なれど唐津屋榮三郎、暹羅では、異國人と戰禍を交えた程剛の者、素早く脱したが、相手の大勢に引きかへ、此方はたつた一人に、しかも女連れ——必死の力をつくして立ち廻りの最中 出船祝ひの高須歸りの天竺徳兵衛が子分を

連れて通りかゝり、なんなく嘉門一味を追ひ拂つた。

『お、徳兵衛』

『榮三どんか』

二人の奇遇は嬉しかつた、それとしても今の刺客は……

榮三郎には判りすぎる程判つてゐた。徳兵衛にも前後の模様で、ほどそれと知る事が出来た、徳兵衛は榮三郎の身のために、殊にさうした危急を目撃しては黙つて居られなかつた

『堺の家の祖先のと、小さな事を考へる手間で、遅羅に渡つて一脱脱けば、今の唐津屋の身代位はたばこ一服やる間の仕事だ……苦しい義理やり面倒ないささは、ちぬの海へぶん流して、いや流すとは船の禁句、運の追手を眞所に受けて西へ、海へ乗り出さうわさ……』と、徳兵衛の切なるすゝめ、明朝出帆といふあの船で再び遅羅へ渡る決心をする

その時新七も来るので、南宗寺に居るお小夜と共に連れて立ち退こうと、榮三郎の兄妹や家来思ひの言葉に新七も嬉び立つ思ひで、早速南宗寺に急ぐと、又しても以前の浪人輩が一同を取り圍むと、徳兵衛は立ち閉がる

唐津屋座敷の場……半齋と治右衛門が圍碁に事よせて今宵の首尾を案じて居る、言はずと知れた榮三郎殺害に廻した浪人共の吉報をまちあぐねて居るのだ、其處へ、新在家へ使者にやつたお富士が歸つて来るので、時間のかゝつた事を語る

が、好色の吉十郎が、お富士のために治右衛門の怒を納める

『あんな女に埒もない事を仕かけたら肝心の己の望みは叶はぬぞと暗にお小夜對の一件から唐津屋相續について、治右衛門は我子吉十郎を戒めるが、更に吉十郎の耳には入らぬ、其處へおちせも歸り酒の支度にかゝると、續いて榮三郎が、吐を固めて最後の談判に這入つて来る

結局家督は再び榮三郎の手に戻す事にするが、話が決まれば目度度いゝで、半齋がとりなし上りしく酒になるが、その酒こそ、毒酒である、榮三郎は知るや知らずや、一氣に呑みほすと、家督譲りの證書を書かせ、その替りとして、家の債務は治右衛門に對して果すべく金を數へ初めるとそろゝ胸が苦しくなる様子始めてそれを悟つた榮三郎は

『こなたは、此手で親父を殺したな、今また私も殺すのぢや、親を殺し家を横領し、處へ母様まで

榮三郎は次第に息苦しい様子、母のおちせは、内心の動亂に怵えかね、毒酒の入つた銚子をとつて一息にグツと呑む

『母様貴方はこの酒を』

『毒と知つて呑みました』

『なに、おちせが その酒を』
既に倒れかゝらんとするおちせを治右衛門が抱き起さんと近よる所を、榮三郎は抜き打ちにざくり。

明鳥夢泡雪

一山名屋庭先の雪責一

舞臺

二間半の本縁付の亭座敷、向ふ茶壁の茶立口、下手に、淨瑠璃臺の二階家、此の奥（正面）雪の積りし忍び返し附の黒塀よき所に振よき松の立樹、石燈籠舞臺一面に雪布を敷き、上手の椽端に氷の張りし手水鉢、二重よき所に行燈を灯し、床の上に絹布の小かいまきを引かけ、四郎兵衛蓑盆を控へ住居、松の立樹に浦里繩にくられ居る。その傍に遣り手おかや庭下駄を穿き、箒を持ち立ちかゝり、禿みどり泣いてゐる。

この見得雪おろしにて、幕あく
直ぐに竹本の淨るりに

なる

吹き来る雪吹雪、内には亭主が浦里を庭の古木にくゝり附け、折りふし、おかやは傍で壁あら

うげ

かかや サア浦里さん、此苦しみがせつなくばアノ時次郎とすつぱり切れてしまつたと云つておしまいよ。サア切れたとすつぱり云ひなさんせ、言はずばかうして云はするぞへ、

——みどりを引すへる

みどり

アレイ

浦里

竹本へすつと寄つて引据へれば浦里涙の顔をあげア、もしおかやどん、如何に此身が悪いとてまだ頭はないその子まで、見るもみじめな雪の中、その子に何の科あつて餘りと云へばお情ない

おかや 何情ない事があるものか、早く切れたと云へばい、
のだ、云はぬからかうするのだ、

ト よろしく、みどりを打ち据へる

みどり もうしかかさん

浦里 コレ

みどり ではない、花魁、私しやせつないわいな、

浦里 オ、尤もぢや〜わいな、皆私が悪いゆへどうぞ堪へてたもや、

みどり わしや切なくとも大事なほどに、どうぞ花魁をゆるしてあげておくんなんし

浦里 それ程までに。え、可愛や〜

ト よろしく泣き伏す

おかや オ、苦しからう〜その苦しみが助かりたくば、アノ時次郎と切れるがよい、え、此の餓鬼めが小ませ

た顔わへ

ト 竹箒にてみどりの顔をつく

みどり あれ、痛いわいな、

浦里 え、情ない、たとへ此身がどうなるうとも年端も行かぬそのみどり、その子は助けて下さんせ、モン旦那さんお慈悲でムリますわいな

竹本へお慈悲〜と恩愛の、子故の間に身を悶へ、

聲をかぎりに泣きければ、四郎兵衛は詞をや
わらげ、

ト 此うち、よろしくこなしあつて

四郎兵衛

ハ、その苦しみ心から惣べつ遊女を折檻して容を堰くこと、客の爲、女郎大切、身代が大事、

アノ客も若い人餘りしげ〜通はれたら、親かゝりなら勘當うけ、主持ならば親方の手前仕損ふは知れてある、此中年季を切替へしたも、皆アノ客の爲め

此上は心中か駈落か、どのつまりは知れてある、詮索これ迄云ひ聞かせても聞入れお強つくばかり、

その餓鬼が不憫に思はじ、すつぱりと時次郎を思ひ切つたと云ふて仕舞へ、コレ浦里思案して返答しや

れ、

ハさししながらも四郎兵衛が詞に、おかやはもどか

しがり

おかや

それとも何處までも強情張り、旦那のお意に反くとあらは腕には年はとらせねへ、此竹箒をお見舞ひ申すぞ、

浦里

どんなな折檻受けうとも、二世と誓ひしその人を思ひ切る氣はムんせぬ、爰が廓の意氣地でムんす

四郎兵衛

え、しぶといあまた、ぶつて〜ぶち据へろ、

かや 合點がてんでムリます。サア吐はかせ、是これでもおのれはぬ

かさぬか、かうくく

〽箒はらをとつてうくく責め吉きにみどりは聲こゑをあげ

みどり アレ花魁はなけいを

かや え、邪魔じやまな餓鬼がきめ、退ひいてゐい、

〽浦里うらりめがけ立たちかゝり、

二打にうち、三打さんうちうつしふと、痛いたさ堪たゆるかたへより、

縫ぬいる袂たもとを拂はらはれて、紅葉もみぢのやうな手てを合あはせ、拜まが

みまわるぞいぢらしき、おかやはなほも荒氣あらいなく

箒はらを振はり上げ打うつ事ことみどりは縫ぬいりつく

いろくこなしあつて

かや え、此このあま、どうしたら腹はらに癒いよう、サア時次郎ときじろう

と切きれると早はやくぬかせ、

〽振ふ上あぐれば、イヤ打うたせじと、とどむる松まつにから

む蔦つたかづら、拂はらふも雪ゆきの横吹よこふき雪争ゆきまそふはづみにたよ

わくも、ウンとばかりに悶絶もんぜつす

ト 此内こゝ、おかや、浦里うらりを打据うちへる、みどり

是こゝを止めやうとして脇腹わきはらへ箒はらの柄えいがあたり、

氣絶きぜつする、浦里うらりびつくりしてハツと泣なき氣絶きぜつ

四郎兵衛しろうべゑ ヤ二人ふたりとも氣絶きぜつしたか。おかや氣付きつけでも呑のまして

やれ

かや その御心配ごしんぱいには及びません、少すこしかうしておく内うちに

雪水ゆきみづが咽喉のどへ通とおれば直すに息いきを吹ふき返かへしますよ

四郎兵衛しろうべゑ ム、それもそうだな、息いきと云いへばこの内うちにおれも

一息いそ入いれるとしやうか

かや 寒さむさ凌しのぎの熱爛あつらんはあんまり悪わるくはありませんよ、

四郎兵衛しろうべゑ 手前てまへ附つ込こむ了りやう簡かんか、

かや 爰こゝが附つけ目めといふところさ

四郎兵衛しろうべゑ 妻つまを相あ手てにや下くださらねへ、

〽あとに心こゝろを奥庭おくにわの打うちつれ一ま間まへ入いりにける

ト 兩人ふたり這入はいる

本もとつり金棒かねぼうの音ね

引ひけの拍子木うちわだかま聞きへる、

風音かぜねになり、浦里うらり心こゝろづく

新内しんない 〽火ひの要心ようしん、さつしやいませう

〽浦里うらりあとを打見うちみやり、

涙なみだにくれて居ゐたりしが

浦里うらり テモ情なさけない此責苦こゝろせき、何なにも知らぬ子供こどもまで。

ト みどりの氣絶きぜつしてゐるのを見て

コリヤみどりまでのコレ、みどり、みどりやい
〽云いへど答こたへも嵐吹あらいく、聲こゑ聞ききつけて駈出かけいづるゆか

り、

ト 下手より沓ゆかり出る

ゆかり 花魁、逢ひたうムんした、

浦里 オ、ゆかり、よふ来てたもつた、みどりが氣を失ふ

て居る程に呼びつけてたもひのふ

ゆかり え、みどりどんが、ドレ何處に

浦里 ソレ、其處にぢやわいな

ゆかり ヤこりやみどりどんが。花魁どうせう、どうしませ

うぞいなア

浦里 爰へつれて来てたもひのう

ゆかり アイ

ト いろ／＼こなしあつて、二重にある座布

團を持ち來り、此上にみどりを乗せ引ツぱり

浦里のそばへ連れて來る

浦里 みどりヤイ

ゆかり みどりどんいのう

＼きのふの花は今日の夢、今は我身につまされて、

義理といふ字は是非もなや、勤めする身のまゝな

らぬ、

ト この内ゆかり手水鉢の水をくまふとして

杓を取ろうとしても氷が張つて取れぬ故、氷

を割つて水を汲みそろ／＼と持つて來る時づいてころぶ、水こぼれるので又汲みに行き浦里の傍へ持つて來る、

浦里、みどりに口うつしに吞ませる、ゆかり

は笠を持つて來て浦里にかざす、震へてゐる

みどり、やう／＼心付き

みどり

浦里

花魁くるしいわいなア

オ、堪忍してたも／＼、この苦しみに引替へて、あの

二階の三味線を聞くにつけても思ひ出す、いつぞや

主の流連に寝まきのまゝで引よせて弾く三味線の面

白さ、それに引かへ今頃は何處にどうしてござんす

やら、添ふに添はれぬ二人が身の上、あじきなき浮

世ぢやなア。

＼好いた男にわしや命でも何の惜かる露の身の消へ

ば恨みのなきものを

コレゆかり、そなたも嘸悲しからうが、悪い女郎に

つかはれて思はぬ苦しみ、爰に居やつたら又このみ

どり同様にどのやうな目に逢はふも知れぬ程に早う

行きや

ゆかり

浦里

ゆかり

アイ

こなたも嘸、寒かつたであらう、堪忍しや

イエ／＼私や寒うはござんせぬ、さぞ時さんがあの

やうに若衆さんに叩かれさんして口惜ふムんせうと
思へば、ぬしの心が思いやられ、わたしや悲しうム
んすわいな、

浦里 オ、よふ云ふてたもつた、サア、私にかまわず奥へ
行きや、

ゆかり アイ

ト 言へど立ちかねる

浦里 エ、行きやいのう

ゆかり

アイ

△アイと返事も涙ぐみ、
心残して奥へ行く

ト しほくとして奥へ行く、浦里見送り、

浦里

オ、もう行きやつたか。ア、不憫やなア、あのゆ

かりは他人なれども、みどりは我子、共に苦界へ身
を沈め禿といふて使ふて尾れど、へだてなうして居

れば實の妹かなんぞのやうに慕ふてくれる愛らしさ
それにつけても時さんに今一度逢ひたいくわいな

△たいへ此身は泡雪と共に消ゆるもいとわねど、こ

の世の名残り今一度、逢ひたい見たいと、しやく

りあげ、狂氣の如く心も亂れ、涙の雨も雪解けて

前後正體なかりける

笠をみどりに着せよふとしても、縛られてゐ
る故、口にくわへて冠せて泣く

△男はかねて用意の一ト腰、口にくわへて身をかた

め、忍びくして屋根づたひ、見るに浦里うれしさ

と、悲しさ、怖さ、危ぶなさに、難なく下に降り

立つて、結びし繩を解きほどき

ト 黒堀の外より一本差にて松をたよりに降

りて来て、繩をほどき

浦里

オ、時さん、よう来て下さんした逢いたかつたく

時次郎

オ、かくなる上は死出三途、兎に角思案は道にてせ

浦里

人目にかゝらぬ、そのうちに

時次郎

浦里來やれ

浦里

アイ

△覺めてあもなく明烏

此時、若者一人伺ひ寄つて、

若い者

ウヌ時次郎、

ト かゝるを見事に投げ返す

△後の噂や残らん

ト 三重にて引張りの見得よろしく

一幕

五月の白木屋

JOBK放送開始五週年記念展開催！

開催毎に好評を博しつゝある堺筋白木屋の夏の銘仙競技大會第四回大會は五月一日より七日間、同店三階大舞臺に於て開催されてゐるが、今回は特に伊勢崎秩父、八王寺、桐生、其他全國の優秀作品を競技的に陳列し、五体の人形にそれ〴〵衣裳をつけて一般來店者の參考に資してゐる等も目新らしく又思ひ切つた特價品を山のやうに積んでゐる。

尙同店では十六日より二十九日まで夕刊大阪新聞社主催、大阪中央放送局、大阪電氣協會、ラデオ商組合等の後援で行幸紀念電氣とラデオ展を催す由であるが、近來電氣文化の時代と云はれる如く電氣の普遍家庭化が行はれて人間生活の幸福は一に電氣應用の巧拙にかゝつてゐる、又ラデオの發達は實に急速なテンポを以つて進出し、殊に本年六月一日はJOBK放送開始五週年に相等し、今やラデオは娯樂慰安機關として聽取されるのみならず、今日では實用教化方面に新面目を發揮しつゝある現狀で、是等電氣の家庭化ラデオの活用如何は一面我國社會文化のバロメーターと見て然るべく、畏くも風薫る候、わが大阪に行幸あらせらるゝ光榮を紀念として、白木屋が同展を開催することは、我國文化の一面を窺知すると共に、同時に放送五週年を紀念する意味に於て甚大であらう。又同展の人氣を凌る爲め一般入場者に福引券を洩なく呈上し、素晴らしい景品を出すど。

長谷川伸一作
 脱衣草鞋



た。

「今頃客が来てゐるのかよ」
 「一人來てる、陸の者よ」
 「陸の者の癖に川風呂へ來るのか、物好きな奴だなア」

「なに化ケ物屋敷の歸りだろ、わしの船の湯へ來るやうでは、どうで景氣が悪い人なんだろうよ」

「化ケ物屋敷でなんだね」
 利根川縁にある錢湯船の亭主五兵衛は、幼い時から友達でこの川風呂の近所に住む船頭の源兵衛に煙草をふかしながら話をするのだつ

化ケ物屋敷といふのは、毎晩賭場を開いて

ゐるこの邊の立廻りの屋敷をいつた。それで賭場の事を化ケ物とこの邊の人は云つてゐるらしい。

「あゝ其處へ行つたんだな、おいらの船の二才野郎奴が日暮から姿を見へねぬ、野郎奴汗あぶらで貯めた錢をほくち場へ取られに行きやがつたよ」

船頭の源兵衛がこいつで居るさ、湯に入つた賭場歸りの若い男が船から出て來た。

「あゝ耳が痛へや」
 この聲に氣のいゝ源兵衛は

「若い衆、お前にあてこすつた譯ぢやねぬから怒つてくれるなよ」

「何を怒るものか、おいらの一里さきから取られに來た馬鹿な奴だよ、取られると懲々した氣になるが、今夜のあの男みたいに、場の金を一人占め同様にしてゐるのを見るさ、あすも一場また行く氣になるよ、どれお休か」
 男が歸ると、源兵衛も五兵衛も皆それく別れの挨拶を告げて船に入つた、利根の河さ岸は悉り静かになつた。

突然堤の方に聲がした。

「どうした、見付からねぬか」

「ヤケに勾配の早い野郎だ、あれつといふ間

に繩抜けして、もう見へなくなりやがった、
確に此處へ来た筈だ」

イカサマ師に繩抜けされ、その跡を追掛けて
来た、賭場の親分岩名の嘉十と血眼になつて
さがす自分の與助の聲である。と堤に三四人
の影がみへた。皆イカサマ師を探す連中らし
い。

「だから云はねの事ぢやあねの、繩の結び口
はキツチリやつとけと日頃からやましく言
つといちぢやねの、外聞が悪いや、岩名の
嘉十は確な千分を持つてゐねへつて、第一今
晩だつてさうだ、蝦夷松前の奴が肥前長崎の
奴か名も戒名も知れねの渡り鳥同様の、ひよ
つこり現れたあ。野郎を、一ト目見たゞけで
一ト癖あるなと思ふべきを、汗濁して甘がつ
てゐやがるから、あんなイカサマもイカサマ
大膽不敵なイカサマをつかやがつて、ご奴も
ご奴も明盲だ、それでやくざの飯を喰つてゐ
るご云へるかい、半がうちだつて見分ける
ぞ」

「へは、申譯がありません、全く谷の野郎が
ブマなんで、谷の奴も確に日頃習つた通り結
び口にカガリをけかたんですが、縛られる野
郎が二三枚うわ手なんで器用に指を働かせて
結び口にまで、イカサマの手を用つたんでさ

ア一
「何をいやるんだ、あのデカイ船を探せ、
與助おれさくるんだ一
こゝ云つた千分の信吉は裸足になつて利根川
船のさもへ上りかけた。皆は思ひ思ひの探し
場について堤には人の影が見へなくなつた。

おつる——飯富の勤八の女房、今年二十四
五才、顔の造作も整ひ泥水の少しは飲んだと
思はれるアカ援のした女——が男を追つてこ
の堤まで来たが、男の生死を案じ嘉十と次の
問答

「聞き慣れねの女の聲だが、何んだね一

「富五郎はごうなりました、賭場の法度破り
イカサマ骨子を使つたさかで、簀巻にされて
沈められるさか聞きましたが一

「それがごうした。富五郎つてのはお前さん
のなんだね、亭主か、それとも情人か一

「亭主でなし、いろでなし、赤の他人ですの
さ、私や富五郎にうらみを云ひたさに業々こ
ゝまで来たのでさ一

おつるがこんな事をいつて居る間に、賭場
破りに押へられ私刑に處せられやうとしたが
繩抜けして逃げ、油断を見すまして再び賭場
へ引返し、在り金を引つさりつて高飛びしや
うさ、今土手にかゝつた兎鳥の富五郎は、お

つるの居るのを知つて常夜燈の臺石の處から
様子を探つて居る。嘉十を探して堤へ上らう
とした力士上りで嘉十の子分根下り彌太は
「野郎」

と云ひささ富五郎を羽翼締りにする、案外
力の強いのに驚き

「何をするんだ、人違ひだ、こいつあいけね
は、さんだ馬鹿力だ一

「彌太ぢやねの、認めた、門郎捕へたな今
行くぞ一

親分の嘉十がこゝ嗷鳴ると皆は女の方は振向
もせず富五郎の方に走つて行つた。おつるは
この隙を利用してごかへ走り去つた。

「たうく又縛られたか、へつ、我ながら惡
久地のねの事だ一

「手間ごるのは禁物だ、早いがい、ぞ、もう
一本捕縛はねの、なけりや手拭で足首を

縛れ、こんな奴だから水の底へ潜つてまでイ
カサマをやらぬと限りでね、彌太手前さ信
吉で川へ抛込め、濟んだら直引上げる、與助

は俺と一緒に一足先へ引揚げるんだ」

おつるは驚いて常夜燈の下闇に蹲まる、嘉十
と與助は去つて仕舞ふ。

足を縛られやうとしたので富五郎は彌太を
蹴倒す

「野郎まだ暴れやがるか」

「何をしやがるんでは、利根川の底を屋敷にしろつてのが、よからう面白い、店賃なして氣永に住んでくれらわ」

「旅人、いさぎよく出来ねのか、手前男ぢやねのか」

「お前も男だ、それ程いふなら俺と一緒に利根川へ沈んでみねのか」

「飛んでもね、俺あ厭だ」

信吉と彌太は富五郎を川へ抛込むと逃るやうにして姿を消した。

水音に驚いて源兵衛も五兵衛も船の外へ出て来る

「源兵衛さん、だれか川へ抛込まれたらしいよ」

「そりやさんでもね、事をする奴があつたものだ」

氣の早い源兵衛はもう飛込みし度を切めた。おつるも船の上に立つて川面を覗いて居た。

「お前は誰だ」

「私や川へ抛込まれた男の女房でさア」

五兵衛がおつるに話かけて居る間に源兵衛は富五郎を川から救上げた、おつるを見て驚き源兵衛は

「お前さんは」

「今の男の女房なんです、うちの人を助けて下さつて有難う存じます」

源兵衛も五兵衛も、「まあ救かつてよかつた」いふこなし。湯から上つて借着をして上つて来た富五郎はいたつて平氣である。源兵衛は自分の船にはいつて仕舞ふ。

「この女はお前さんの女房か」

「なに婢でも情人でもありません、ありや或る處の親分の姐御でさア」

「それにしても變だ」

おつるは自分の旗色が悪いのこ、富五郎が本當の事をいつて仕舞つたのにムツとして

「お湯屋のおちさん、濟みませんがちつと遠慮して頂きたうございますね」

「は、わしに何處かへ行けさいふのか。話が

あるなら明日にしたがい」

「冗談おつしやい、この人は賭場破り天道様のお上りを待つて話す身ぢやありませんよ」

「お前さんの事は知らねが、富五郎の方はさうだ、まあ氣を附けなよ」

好爺さんの五兵衛はさういつて船の中にはいつて仕舞つた、跡には富五郎とおつる

「ね、富五郎さん、これから直に高飛びしておくれ」

「俺ア厭だ、三日でも十日でも世話になつた

飯富の勘八親分にそんな事をして濟むものか

「何を云つてるのだ、お前を追ひかけて飛び出した女があるのだ、さうに親分の顔はつぶしてよ」

「そりやお前はんだだけの事、あつしが知つた事ぢやね」

「さうは云はさないよ、迷はせたのは一體誰だい、兎鳥の富五郎さいふ旅人のイカサマ骨子の名人お前さんぢやないか、

「俺は女が欲しけりや賣女を抱かあ、他人の女房に垂らす涎は持合はさね」

利根川船の白帆が見へ悉り夜は明け離れた。

二

利根川沿岸の布川の旅館屋の二階座敷、この窓からは遠く山麓が其の前には人家や寺の屋根、それに木立等が見へる、徳満寺地藏市の人寄せに踊りの種古が催され喧しく鳴物が聞へる。富五郎とおつるの二人が對話。

「姐御、これぢや話が違ふだらう、こゝは俺の泊り座敷、姐御は下の座敷ぢやねが、不意打ちの引越しはひざからう」

「別々では何かと不自由だから、それで今し方引越したのさ、何い、やね」

「別々では何かと不自由だから、それで今し方引越したのさ、何い、やね」

「そつちはよくても此方は悪い、そんなら俺が下の座敷へ行きやしよう」

「待つておくれ」

「放さねばと手荒くするぞ」

「惚れた男の中ツ腹、憎かあないねね」

「何をいふんでね」

振り回らされたおつるは淋しそうに

「邪慳だねね、富さんお前は木の股から生れた人が、生身を持つた男なら……」

「イカサマ骨子は使つても人情まで、イカサマぢやねば富五郎だ、姐御、お前はん、そんなに弱く出てくれるな、ゆふべから今朝にかけて、また源兵衛さんの船の中で、あんなに強く食つてかゝつた、あの我武者羅であつてくれる、さうすりやあ俺の心が安らかだ」

昨夜船の中で約束した通り飯富の勘八親分の處へ歸るとする道中三日、今夜の宿、明日の一晚か過ぎたら、もう二度と富五郎に會へない。こう考へて見ると昨夜の様に我武者羅で居る事がどうしても出来ない。

「そんな淋しそうにしてくれるな」

「富さん、もしかお前、本當にいくらかでもあたしを思つてゐておくれなぢやないかへださすりやあたし本望だ」

「いや何んとも思ふものか、他人の女房は高嶺の花だ、水に寫つた三日月様よ」

「掴めは掴めるよ」

「俺ア水に濡す手は持たねね」

「怖いからか、砕けて散るのが恐ろしいからか」

「女出入りで命一つを棄てる場合もあるか知れねねが、俺ア間男と名をつげられて墮すのぢや命が惜しい」

「あ、矢張りお前はあたしを想つて、おくれなんだ」

富五郎は急にあはて、

「笑、笑談いつちやいけねね、旅から旅へ股にかけて立人張りの賭場ばかりでイカサマ骨子の扱ひで生馬ごころか人間の目のくり玉をでんぐり返させ、諸國遊山の流れ歩き、一人勝手な遊びをする俺に、惚れた睡れたがあるものか、欲しけりや津々浦々に錢で買へる女がいくらもあらあ、姐御、思ひあがるのはよしにしよう」

「欲目で見えた見當違ひか、いや、さうさばかりはいへない、富さんお前が迷まはるのは附け廻しつするあたしが怖い五月蠅ばかりかそれさも自分の心の中に觸られたくない處があつて、それが怖さに逃げ廻るのかい」

「ね」

富五郎の顔はさつと變つた。自分の急所をつかれたからである。女は稍勝ち目を見出した

ので男の方へ進んで来る

「傍へよるな姐御、俺の心を掻きむしつちやいけねね」

何を思つたか富五郎はスツクと起ち上る。女はそれを遮り縋りついて

「何處へ行くのさ、お前」

「この一身の破滅は目前近くなつた、俺アこゝからたつた今、草鞋を穿いて出て行くのださもなけりや一生涯、われも我が魂に罅が入つて、死ぬまで痛くてならねねだらう」

女は暫く黙してゐるが

「富さん、あたしを殺しておくれ」

「はッ、な、何だと」

富五郎とおつるの二人がこんな濕っぽい事を云つてゐる時、女中がはいて居た。おつるは下の座敷に引き取つた。其處へ岩名の嘉十が子分大勢をつれてはいつて来る、スベと富五郎は脇差を引き込み、座敷の隅をうしる立てに見立て座を構へる。

「だれかと思つたら岩名の嘉十親分、よくおいでなすつた。わつしや利根川の底に生キ飽きが来て、矢つ張り陸がいゝので上つちまひました」

「それは手前に聞かすとも知つてゐるからやつて来たんだ」

「ぢやもう一度川の底へ沈め、鯉やまるたを

「見せるのですかい」
「望みがあれば見せてやるが、今日は話は別口だ」

嘉十は富五郎に賭場破りの一件は沈めにかけた事で帳消しにしてやるから、残つてゐるのは賭場の有り金だから、その金を返して貰ひたいといふ。富五郎はその金ならトツクに使つて残つて居ないといふ。すると嘉十は聲を低め「實はな富、手前のそのい、腕を暫く俺に貸てくれ、無論たゞとは云はねばよ、三つ割の二つはお主の物だ」

「大きな賭場を開くから、俺のこの小手元で器用に儲けさせるといふのかね」
「割つて云へばそうなんだ」
富五郎は甘く見せてゐた態度を急にかへて「厭だ」

嘉十はそれに應へて「何ださ」
「へら降め、イカサマ師を渡世にしてねば俺ア道中すがら氣の入れねば噂の立つ親分とかいふ奴の賭場に限つて荒してゐるんだ、例へば手前の賭場がそつだ、評判がよくねはそイカサマを仕組むなら俺位の腕でやれ、手前の賭場はやらすぶつたり、素人を捲上げる渡世上ではみつともねは、錢欲しがりの各つたれだあ」

「出放題を吐しやがるなア、それ」
嘉十の命令一下、暫く渡合となる。
「其處へ年の頃四十才前後で飯富の勘八の兄弟分押付け銀平が、まアく待つた待つた」
と割つて入り

「お前は幸平の嘉十さんになア、何の喧嘩か知れねが、この男には大事な用があるんだ不承して俺にくれる」
「だからと思つたら押付けの銀平さんか、くれならやるが、その譯は」
「岩名の」……と云ひかけたが「野暮をいつちや困つてしまふ、人に聞かせられねば厭な用さ」

「さうか、ぢや一先づ俺は承知しやう、その代り銀平さん、お俺の方の用が済んだら、あいつは前の方へ貰ふからなア」
嘉十は銀平に義理があるから、その手前手を一度引くといつて歸つて行つた。

×

「まアそんな譯で此方の一寸の手ぬかりから到當逃て行つて仕舞ひました」
銀平は酒を呑んで居る勘八にさういつてゐる「屋根の」方に物音がした。と見るに富五郎が屋根つたひに來てゐる。勘八は「おゝ富」
「親分、その節はいろ〜お世話になりました」

た。親分それを見ておくんない」
富五郎は片袖の包を開ける、立合せた一同は立ちか、らうとさるを勘八は徐に靜め屋の棟に置かれた首を噴める。
「氣の早い事をしやがつた。富なんだと手前おつるをバラした、俺ア二人でズラかりやいゝと思つてゐたのに」

「バラしやしません、頼まれたから首を斯つた、それも姐御が乳の下を突いてからの事ですア、拂ふに拂へぬ迷ひの煩ひの種をアツツリ切るためでしたよ」
……

「富、最後の際に手前ハッキリとおつるに惚れてやつてくれたか」
富五郎は勘八の顔を見て、それが肌を許したかの意味かととり

「いゝよ」
「何だて、この人情なし、死んで行く奴に何て命を抛出して惚れてやらねばんだ、は、馬鹿な野郎だ」

富五郎はおつるの首を抱いて「あつさうだつてけーさうだつて、さうするんだつてけーと屋根に伏し咽び泣きに泣き入る勘八は燭臺の灯を吹消す、銀平も一同灯を靜かに消す、闇の中に富五郎の咽び泣く聲のみが聞へる渡り鳥鳴いて過さる。

今様

瀬戸英一作



一
田端邊にある可祝の實家。
幕開くと、可祝と彼女の母親おくら、それ
に可祝の胞輩の定榮の三人が長火鉢をかこん
での話

「どうしてもお勝ちやん、行つて仕舞ふ氣か
ね」
可祝の本名をお勝と云つた。定榮は殘りの言
葉に一片の希望を抱いて、お勝の決心を歸ら
さうと試みた。母親のおくらはなかなかに嘆願す
る様に
「もう一度考へ直す氣にはなれないかへ」

「何を云つてゐるのさ、證文も極つて、お金
まで受取つちまつてゐるんぢやないか」
可祝のハツキリした返答に、おくらは返す言
葉が一寸見當らなかつた。然し漸くの思ひを
してこつた。

「それだつて返せば……」

「返す金が何處にありますよ、右から左にな
くなつちやつたんぢやないか」

可祝はツンとして何事も取上げやうとしない
母親も悉く黙つて仕舞つた。

可祝は新橋で以前丁字屋といふ看板を持つ
た屏の藝妓であつた。それが六三郎といふ男
が出来てからは、篠さんといふ旦那には別れ

看板も賣拂ひ、それから定榮の屋の看板を
借つて働くやうになつた。けれども男に貰ぐ一
方で、家への日々の仕送りは欠け、借金はか
さはるばかりである。到當新橋にも居た、ま
らす、宇都宮に烏替することになつた。つい
この間、話が出來證文も入れて、愈々明日は
宇都宮に行くといふ前の晩である。その金も
家の諸費ひ、大半は男に入れて今では無一文
に近い有様となつた。

「私は従しんは今にも宇都宮行きが破談にな
つても、篠さんと擦り氣は絶體にない
んですからね、これだけは誰がなんと云つて
もお断りしますよ」

母親はホト／＼弱つた様に、
「どうしてだろうね、まだあの男に未縁があるのかね」

「ね、ありますよ、無いと云や嘘になる。私は六三郎さんに未縁は充分ありますよ」

「お前に惚れてやしないんぢやないか」
「どうして、お母さんにそんな事に分る」

半信半疑、六三郎が果して自分を思つて居てくれるのか、この點になつてくると疑はずには居られない。現在自分の口から肯定して居き乍ら何んさなく物足りない感じがして来る

「だつて皆さんがさう仰有るぢやないか」
「皆さんて……世間の人に何が分るものですか」

「ぢやお前に惚れるといふのかい」
鋭く母親に追求にされると、可視は確心がな

いだけに、云ひ返す言葉と勇氣がなくなつて仕舞つた。

「假にも惚れる女をこんな目に遇はせて男の方で済ましておられるものかね。女を裸にして、家族の者に難儀をかけて……」

「だから別れたんだから、それで文句はないぢやないか」

傍らで聞いてゐた定榮は母親のおくらに代つて云つた。

「そりやまあね、お母さんお勝ちやんがこれだけに何する程なんだから、私達には知れない好い所があるんでせうよ。ですから一概にお勝ちやんが欺まされたの、裸にされたのは云へませんがね、お勝ちやんどうだろう、お前さんが本當にあの人と別れて仕舞つたんなら、もう一遍篠さんの世話になつたら、決して篠さんは、お前さんが厭で切れたんぢやないんだからね、あの人さへ附いてなきやア篠さんは今日からでもお前さんの世話がしたいと云つてるんだがね」

「お定さん折角ですけど、私も新橋のかしこです。男があるからつて切れた旦那と男と別れたからつて、おめ／＼擦りは戻せませんからね」

「意地から云やあさうだけぞ、そんな意地のために宇都宮なんかへ行つて仕舞つてさうする氣、女が旋鳥になつたら、私はもう取返しが附かないと思ふよ」

「それだよ、お母さんの心配するのは、男と別れてくれたのはいゝけど、その爲めに

お母さんを置いてき廻にして、お前さんに他國へ行かれて仕舞つて、私の心細さはさうなるんだ」

「兄さんが来るからいゝぢやありませんか」
「文蔵は文蔵さ、私は何方かつて云へはお前と一緒にゐたいんだ」

「それはお母さん、勝手過ぎるぢやありませんか、私だつて何と好きこのんで宇都宮なんかへ行きたかないよ、でも私が住替に出ないぢや、家の始末が附かなくなつてるんぢやないか」

「それはお前、お前が……」
お母親のおくらも敗けては居ない。

漸くの事で話を纏めやうと定榮が口を出すさ、母親のおくらがいゝ氣になつてそれに差出口をする。すると可視も敗けてはゐない。

こんな調子で同じ事を幾遍となく繰返すばかりである。

「フン、美しい着物を着て、旨いものを喰べて、贅澤の仕放題をして、それが人間の一生なら、私は人間をお断りしますよ」

「お前お母さんに云い分があるのかへ」
「云す分なんかありませんよ、云い分がないから六三郎さんとも別れたんぢやありませんか」

「私は何れもね、お前の好きな人と無理に別れると云ふんぢやないよ、お前の爲にならぬんだから別れた方が爲めに好いと云ふんだ」

「分つてるよ、親より大事な男が外に出来た
となつたら、成程お母さんには心配でせよ
よ。早く云や親の嫉妬だ……」

「ヤケ氣味で可視は口から出放題の出鱈目を云
ひならべる、人間の氣持意地さいふものは面
白いもので、自分では諦めやうと思つて居る
時、寧ろ全然何事かに對し諦めて居る場合で
も、第三者からトヤカク云はれると、心にも
ない事でも反對を打つて見なくなるものであ
る。可視が六三郎に對す氣持も左様いつた反
抗的意識の作用する處が多かつた。」

「あ、厭だ、こんな窮屈な人間に一體誰が
頼んで生れて来たんだらう。」

「お勝」

「人間はぶつつけに親に生れるに堪るね、子
供なんかに生れるものぢやない。」

「お前、それを私に謂ふのかへ」

「今まで我慢をして居たおくらは、この一言が
ひどく氣に障つてか、可視にくつてか、らう
とする。定榮はその仲にはいつて

「まあお母さん、宜敷しいぢやありませんか
私にまかせて下さい」

「其處へ元氣よい車夫の聲が玄關から聞へて
来た
「今日は、古川さんさいふのはお宅ですか」

「ね、さうです」

「荷物を持つて参りました」
それは文藏夫婦の可視が宇都宮へ行つた後に
留守居をするための荷物である。

二

遠く何處からか聞へて来る夜響の軒々を打
つて廻る音が夜の静けさを一層まして来る。
思ひ出した様に向ふの辻からチヤラメラの音
が物の哀れを告げる。何處の軒も行燈をおろ
し深い寢に入つて居る、さすが花柳の新橋も
静まりかへつた真夜中である。

可視は外間もなく酔拂つて往還にねそべつ
て居る。

「おい、起きないか」
「起きない、私は此處で泊つて行く……」
「馬鹿な事を云つちやいけない。泊るんなら
俺の家に歸らう」

「いや貴方ん處へは泊らない」
「どうして」
「小美代さんが來てるさ悪いから」
「まだ言つてるのか、そんな事はないと云ふ
のに」

可視の傍に立つてこんな問答を繰返して居る
男は、可視が身も心も惚れ切つて居る當の遊

藝師匠六三郎である。
定榮を送るさいつて家を出た可視は、途中
で定榮をまきその足で六三郎を訪ひ、果ては
ヤケ氣味で酒をあふり、夜の二時も過ぎるこ
いふにこの様である。ムックと起上つたお勝
は六三郎をつきのけて行かうとする

「オイ何處に行くんだ」
「貴方つて人の心持がハッキリ分つた、貴方
つて人は、唯私の身體を自由にすりやいゝん
だ」

「馬鹿な事を云へ」
「さうよく、だから泊つて行けさばかり云
つて他には何にも心配してくれないんだわ」
男に會つたら、これが最後にあれも云つてや
らう。これも云つてやらう、そしてこの切な
い受入れられない心の鬱憤を晴してやるうと
今男の前に出て見ると、俗に云ふ惚れてゐる
弱味で何にも云ふ事が出来ない。男は

「俺が心配しないさ云ふのかい」
「心配してくれないぢやないの」
「フーン、さうか、ぢやあまあさうにしてお
かう」

「それさ心配してくれて……」
「……」
「一寸……」

「いよ、どうせ俺は薄情なんだから」

「本當の事を云はれたもんだから怒つてるのね」

「アバヨ」

「さう、左様なら」

互は二三歩行きすぎたが、六三郎は振りかへつて

「オイ、本當に歸るのか、泊つて行つたらいいぢやないか」

「いや」

丁度こゝへ自警團の青年が通りかゝつた。青年は二人を怪しげに見つめて居たが

「モシ、どうかしたんですか」と警を掛ける

と六三郎は一寸テレた態で「いや、何少しつれが酔つてしまつたもんですから」可祝は、

「一寸軍人さん」

「何を云ふんだ、此の方は自警團の方だ」

「何だつていゝわよ、一寸何んとかさん、お願ひですから、この人を叱つて下さい、私は

この女房なんです、亭主が薄情でしやうがないんです」

「馬鹿な事を云ふな」

「本當なんです、私が情死しやうと云へば

厭だと云ふ」

「オイ、いゝ加減にしる」

一駈落しやうと云へば厭だと云ふ、だから癪にさわつて酔拂つちやつたのよ
青年は悉かり面くらつて、言葉の出しやうに困つて居たが

「ハア、さうですか」少女の言葉に答へた。

「不粹な返事だね、ハア、さうですか、もう一寸粹な返事は出来ないの」

「さうですか、自動車を呼んで来てあげませうか」

青年が自動車と云つたので六三郎は自分の乗つての車があるといつてそれを呼びに行つた可祝はフト傍を見るに六三郎の姿が見へない

「アラ何處へ行つたんだらう」

「男ですが、今、自動車を呼びに行きましたよ」

「畜生、迷たな、一寸貴方、あの男私の何んだと思つて」

「サア」

「亭主だと思ふ」

「サア」

「情人だと思ふ」

「サア」

「何んでもないのよ、惚れても何にもしないのよ」

青年は「ハア」と「サア」答へるより他に路

がない
「私もそれはよく知つてるの、知つてるからどうかして本當に惚れさせやうと思つたんだけど、それが駄目なの」

「ハア」

「意地なのよ、それでネ、到當、私明月都宮に行かなくやならなくなつちやつたの」

自棄的だつた女の態度が、こんどはヒステリックな聲に變つて来た。

「駄目、駄目、飲みませう」

「エ、？」

「飲みませう、附合つて頂戴」

青年、こそい、迷惑である。

三

可祝が歸つて来るに、兄の文藏と妻のお八重が来て腰て居た。足元の定まらない眼に、

座敷の電燈がチラ附いて頼ださ、お勝はその笠を横に拂つた。電燈は鴨居に打突かつて笠も電球も紛々に壞れて仕舞つた。この物音に

おくらも、文藏もお八重も一時に飛起きた。

「何でなく、人を馬鹿にしてやがらア」

「あゝ酔つてる」

「酔つてる／＼つてお母さん、私酔つてるよ酔つてちやいけなない」

「い、よく、お前一人かい」

「一人、あなたは何時だつて一人ぢやないか
二人でゐた時があるかい」

「い、よく、分つてゐるからお寢み、明日
は早いんだから」

「明日、今日だるう、今日宇都宮へ行くんだ
るう」

「あ、さう、今日だよ」

母親のおくらは可祝の酒癖の悪い事をよく知
つてゐるから、取上げはしない。可祝は不圖
女闘を見るさ、ガラスの破片を片付けてゐる
お八重の姿を見た。

「あ、亂暴しちゃつたね、あら、あの女中
何時来たの」

「お勝ちやん」

文蔵の氣をくんで母親はお勝をたしなめた。

お八重は眼が可祝の眼とピツタリ會ふさ叮嚀
にお辭儀をした。

「あ、さう、御免なさい、あんちゃん御免よ
うつかりしてたんもんだから、兄ちゃん勸忍
してね」

文蔵も別段氣にも留めない。お勝の酒亂は前か
ら聞いてはゐたが、こんなに仕末の悪いもの
だとは思つて居なかつた。

「なに構はないよ」

「構はないよ云つてるけど怒つてゐんだね、
ブン關ふものか、喧嘩しやう、兄ちゃん喧嘩
しやう、私は今日喧嘩したくつて仕様がない
んだ」

今まで我慢して居たお八重は、到當我慢がし
きれずなつてクス／＼と笑つた。

「あら、何が可笑しいの、何か私が可笑しい
事を云つて……あ、い、さうそ、私も一遍あの人
の處へ行つて來なけりやならない」

「何をいつてゐるんだ馬鹿」

「馬鹿ぢやない、私はもう一度逢はなきやな
らない、話の殘りがあるから、よう、あの人
は私がさうしても泊らないもんだから怒つて
歸つてしまつたんだ」

そんな事をいつてゐるかと思ふさ、母親の方
に向いて

「お母さん、水を一杯頂戴」

おくらが持つて來たコップを受取つたかと思
ふさ、それを母親の方へアツ、ケた。

「オイお母さんに向つて投げ打ちをするとは
何だ」

「おムけにははかりさんだ」

「お勝、お前はさうしてさう馬鹿になつて了
つたんだ」

「そりや兄ちゃんは剛巧ですよ、剛巧だから

長男の癖に私にお母ちゃんを押付けて置いた
んだ。一體私が藝妓になつて居なかつたらさ
うなつてゐるだらう、自分の娘、妹に旦那取
りをさせて、これまで樂に暮してゐながら、

唯一人の男に無中になつたからつて、なんだ
ね自分は會體の知れない女を引摺り込んで置
きなから、人に意見がよく出来たもんだ」

文蔵は自分の傷、所をさされ女の悪口を云
はれたもんだから、カツとなつて仕舞つた

「なに、畜生！」

「兄ちゃん蹴つたね」

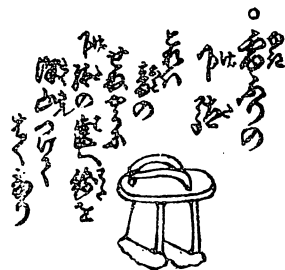
「あ、蹴つた、今までのこゝがあるから黙つ
て居たがもう我慢が出来ない、蹴殺してやる
」蹴殺す、ようし、私の方でも殺してやる、
何だい、そんな意氣地なしでも兄ちゃんださ
思ふから遠慮してやつてゐるんだ。馬鹿間拔け
どちらも眞剣になつてゐた。

「お母ちゃん 出及庵丁を貸ておくれ」

「お前そんな危ない」

「お母ちゃんも兄ちゃんも同腹なんだ」

可祝が本心に歸つた時、血に染まる出及を持
つてゐる自分に始めて氣付き、我ながらこの
兇行に無限の驚怖と戦慄に襲はれ始めた。然
しその時には可祝の身邊にその筋の者が嚴し
く立つてゐた。



「股旅草鞋」

渡り鳥生活

長谷川伸

「股旅草鞋」の場面は利根川沿である、利根川は上州の文珠山の奥から流れて片品川、烏川その他の川々を併流させて上利根、中利根、下利根と三大別され、銚子口で海に落ちてゐる間東屈指の川である。洲が變り流れが變るのが川の常だが、それにしても今から小百年の昔まだ改修工事が施行されなかつた以前の利根川なのであるから、交通機關としては便利の多いものとされた水上運送の爲に利根川が繁昌し、この流れが重要であつた時代の事なのである。

水上生活者が多かつたので日用品の販賣人が船で川を上下して賣り歩いたのは今でも各所の川筋にある船をあやつる行商人と大同小異ではあるが大きな港にある外國船員めあての艦船行商人とは性質が違つてゐる。さういふ行商船に伍して錢湯のあるのも當然の事柄で、利根川筋にはまだ風呂船が存在してゐるだらうと思ふが、近年更に行つてみた事がないので保證つきの斷

言が出来ない。

利根川船と指定した船の形式が實際と違つて舞臺に出てゐるならば、その責を私が負ふべきである、面目次第もないが形式を決定的に知らないのと、舞臺布置その他を考慮した必要上實際以上になつてゐるかも知れない、もしその點が成功してゐたら舞臺装置を擔任して下すつた松田種次氏、演出を擔任して下すつた田中總一郎氏の考慮の賜り物で、もし批難に値する點があつたら明かに私の負ふべきものである。

免取の富五郎の免取とは地名である野州佐野から西に一里ばかり行つた處で今の稱へ方では群馬縣安蘇群旗川村大字免取である。ここで生れた富五郎である。

飯富の勘八といふ親分が出るがこの人は常州茨城の横會根、柳のお柳の夫横會根平太郎事大部平太郎の故郷といふ——と同じ土地の飯富村、そこから出て常陸で有名な鯉淵の與十とい

ふ大親分の杯を貰つて有力者となつた、と云ふ人物なのである。

押附の銀平といふ親分も出るがこの押附も地名で利根川はこゝで東に流れるのを新利根川と呼ぶ押附といふ土地の人である。二幕目の布川は利根川を挟んで木下、布佐と相對してゐる土地で川沿には川園といふ新古二つの防水堤が築かれてゐる、街は丘を脊にして川を望んでゐて江邊の情景は四季共甚だしい。我孫子驛から成田驛へ行く列車は布佐驛で停車する、布佐を横斷して川に出て渡船で對岸にわたると布川である、堤をのぼると眼の下といふ程でもないがとに角も低い處に人家が連らなつてゐる。そして次第に高い方に向つて廣がつてゐる。現在でも利根川繁昌の頃はこの街が大變に殷賑であつた事は古い建物を見ただけでも充分に想像される。

布川には地蔵市といふのが立ち界限數里の人が集まつたものだといふ、その地蔵市はどんな風なものであつたかを私は知らない。私は秋近い祭の方を知つてゐるだけだ。

『土方なる身と空とぶ鳥はどこ何處で果るやら』と唄ふのは土工である。この唄の上七文字を『船でくれば』とか『沖でくれば』とか『マドロス渡世は』とか更めて唄ふのは海の人であるけれど、『やくざ渡世は』と更めて唄つた者があるかど

うかそれは私は知らない。しかし渡り鳥ぐらしはいろ／＼あるが土工と博徒と程に如實に渡り鳥の惡を催させるものはないし勿論それは博徒では旅にんであり土工では西行に限られてゐる旅にんも西行もひとしく渡り鳥であるだけのみならず、その形式と表現とが殆ど似通つてゐるので考へ方によつては混同して差支ないと思はれる。

だが旅にんといふ言葉で現された渡り鳥ぐらしの男と西行といふ言葉で現された渡り鳥ぐらしの男とは、似て非なる點がないのではない。旅にんが『何々お貸元様のお宅はこちらでござりまするか』と第一語を發してから『お數居内ご免くださいませ』までの間に、振分の小荷を門口に置くとか、裾を端折つたまつま羽織の紐を解き紐の拇指にはさむとか、云つた風な形式順序を踏まねば斷じて『早速お控へくだすつて有難うござんす蔭ながら親分さんで、御免なさんせ姉うへさんで、ご免なさんし、折合ましたる上々様、ご免なさんせ。かやう土足裾取りましてご挨拶失禮さんでござんすがご免なさんせ。向ひまして上さんと今度始めてのお目通りでござんす』と前提して郷貫、系統、直屬の親分の名前、自分の名前を云ふ（發しと發音する）事を許されない。これは可成り古い方の習慣で近代的にはもつと形式を略した處もあるさうであるか『股旅草鞋』の主人公免取の富五郎は大体こんな調子の挨拶が一糸も誤る事を許されな

かつた時代に生れたものであつた。

土工の方では前にもいつた通り旅にんといはず西行といふ。

これは長い『草鞋を穿く』といふ場合に『飛びつちよをする』

といふ言葉で意味を表示すると同様、用語は變つても同じ

意味である。旅にんが親分を訪れるのが當然その住宅であるの

に反し、土工は作業場へ行つて挨拶をする、即ち旅にんは家を

中心にするが土工は戶外中心である、二つの渡世が持つてゐる

ものが違つてゐる處からかういふ差違が自づと生れたものであ

る。もう少し強めていへば、旅にんの方は商工業のいづれにも

屬しないが、土工の方は明白に工業に屬してゐる。此の渡世的

ひらきはいろ／＼に現れてゐるが、一口口にいつてみれば『業

』でない博徒には嚴格にして繊細なる儀式的順序があるが、土

工にはその點が大分寛大で荒削りになつてゐる。勿論これは一

方が生活の基調をなす盆莫塵の上の勝負が一種の藝とか術とか

いつてもいい位に巧致を極め人智と伎能の精華を聚めたかの觀

があるのに反し、一方は勞働第一義である處から當然のひらき

が出て來たものである。しかし、この二つの者は素朴なる正義

觀念を強調する事が殆ど生命であるといつていゝ程に『男』を

以て自任してゐる、この自任の程度は人によつて厚薄があるが

大掴みにいへば博徒と稱せられた人々の方が以上に自負が強い

『男』が立つ、立たぬの争ひが血を見たり屍を見たりした事

柄は、近世の賭博を書いた二三の著書にもあり、見る物、聞く物にも傳へられ、また現にさういふ事柄が新聞記事を通じて我々の耳目に入つてもゐる。

私の性癖がさうさせるのかも知れないが好んで旅にんや西行やに材料をとりたがる。これには一應の觀念があるのである。

およそ人に將器といふものがある、彼は有能の男だが惜いかな器が小さいといふ風の事をあらゆる職業人の上で聞く。人に將たるの器はもとより一定不變のものではない、秀吉型もあらうし家康器もあらうし、多趣多様ではあらうが、とに角も抱容量が大きくなってはいけない、人を容れる大きさがなくては衆

を率ゐる親分になり得る筈がない、この點からいへば私は講釋や所謂大衆文藝などに出てくる安徳や飯岡の助五郎などの描き出され方に大きく疑問を持つてゐる者である。がそれは餘談だから差控へるが。

私の捉まへて描く旅にんは衆を率ゐる人物でありながら、不遇であつたり、或は潔癖であり過ぎたりそれに放浪性をも併せ持つてゐる爲に、親分にはなれないが親分階級と伍して人間としては些の劣りも感じないといふ、かうした人物に藝味を持つてゐるのでツイ描く處の人物が往々にして旅愁の霧に罩められた人間になり勝ちなのである。随つて私は旅にんの禮讀者の如

く見えるかも知れないが必ずしもさうでない。判り切つてゐる事だが是々非々だ。いゝ事はいゝので悪い事は悪いと思ふにか過ぎない。

しかし、博徒であるからよろしくない人だといふ考へ方を私は否定するものである。旅にんは責任が割に軽いから旅の恥は掻き棄て式にする者もあるだらうが斷じてそんな事をしない者もある。悪い者がある爲に善い者までが同じ列に置かれるのは間違つてゐると同時に「善い事もするが悪い事もする人」と「悪い事もするが善い事もする人」とが在る事もまた見逃したくなさう。

であるから拙作『柄均酒』や『杓掛時次郎』やには旅にんが扱つてある、いまだ上演されない拙作『飛びつちよ』では西行をする土工を扱つてゐる、此の中でも『杓掛』には主人公以外の二人の博徒に『飛びつちよ』では主人公に善い方と悪い方を混和して割り切つた答へを些ばかり出してゐる。

博徒や土工やの外の諸職の間にも旅にんや西行の如き組織のもとに、日本中をめぐる歩けるものがないではないが、私は博徒と土工と香具師とこの三つのもの程、特長のある渡り鳥的なものはないと思つてゐる。しかも宿り木は至つて堅固で斷じて拒まれる事がないのであるから、旅から旅を股にかけて歩いて

も、かういふ組織のもとに身を投じてゐれば誠に安心なものだと思へる。この組織は爲政者の研究すべき一つの題目で、これによつて何等か社會政策的な暗示が與へられるのではないかと思ふ事久しいが、年を経つと共にこの組織も次第に昔日の觀を失つて行くらしいから、今の内に特志者は眞面目な研究を遂げて置いてくれるにいとと思つてゐる。

旅にんや西行にも義務がある、一宿一飯は與へらるゝものゝ權利ではない一つの恩儀と解釋してゐる。隨つて時には挺身して盡さねばならぬ事情も起れば、大義組を滅するに似た行動もとらねばならぬ。旅にんであるからとて義侠一點張りではなく隨分定九郎もあれば伴内もある、その内から高貴な精神の發露をみせる者もある。

私は『掏摸の家』とか『舶來巾着切』とかいふ題名の示す通りの人物の中から、他人は彼等の失へるものと見る。魂の内部に存外の光りを包藏するものである事を書いた。博徒の旅にんや町内のげぢ／＼男にも同様な或る光りが持たれてゐる事を『編蝠安』や『入墨者の死』に描いた。それと同じ系統を引いたものが『杓掛時次郎』であり『股旅わらぢ』である。惜むらくば作者はまだ掌に入れずゐる間誤つてゐる、この點は一言もない。



妹 脊 暖 語

院本を讀み返して

森 ほ の ほ

A 『妹脊山』はやつぱり半二が立作者なのだらうが、同じ半二の物でも『二十四孝』や『近江源氏』より良いものだ。

B それはその筈さ。半二一生の智慧を絞つたといふのだからね。謂はじ命懸さ。併しそれが爲に、ボンヤリかけた竹本座も息を吹き返して、四五年このかたの不作を取戻したと言ふことだよ。

A パワフルとまでは言へないかも知れないが、兎に角、雄大な作品だね。

B 五段十六景、主要人物十何人。實に大掛りなプランで組立てられてゐる。

A 今なら超特作品と言ふところだ。

B オールスターキヤストで『春日野小松原』あたりから『入鹿退治』まで演れば面白い。君達の素劇連が、かういふ物を研究的にやつてみると可いんだ。それでこそ存在の意義もあ

るといふものだけ。いや、これは話が少しそれたね。處でと君はさつき『二十四孝』よりも『近江源氏』よりも良いものだと言つたが、それをもう少し説明して貰ひたいね。

A さう聞き直るなよ。さつきも話し合つたやうに、實にスケールは大きい、その大きいに似ずむだが無い。そしてそれぞれ連絡があり、照應があつていかにも整然としてゐるぢやないか。先づ私はそれに敬服するよ。

B それはこの作の舞臺を奈良一地方に限つたせいもあるだらうと思ふ。

A それが爲ろいカルカラーが能く出てゐるのが面白いんだ。

B ローカルカラーを出さうと特に企てたわけではないが、口碑や傳説を取入れて綴り合せてゐる中に、自然、ローカルカラーがにじみ出て來たのだらう。私はさう解釋するよ。

A 兎に角、衣掛柳、十三鐘、三輪の杉、緒環塚など、處の傳

説を材料に取込んだ手並は鮮かなものだ。それから……此作にあつては、時代に世話を突ツ込んである……言ひ換ると、王朝時代と徳川期とを、貴族と平民とを、一つ釜でゴツタ煮にしてゐる。前に私が、他の作品に優れて良いと云つたのは全く此點を指したのだよ。

B 私はまた此作に接して感じるのは、人形劇としての部分よりも、語り物としての部分の方が多いといふことだ。手短に言ふと、作者は觀せようとするより、聞かせようとしてゐるやうに考へられるのだ。もう此頃の好尚には、さうした傾向があつたのぢやないだらうか。逸早くも同年に、歌舞伎で演じられたのも此間の消息を語るものではないかしら。

A 君の想像説も容れてやるから、私の説……といふよりも考察かね、これは以前には全然氣になかつたのだが、實は今度讀み返して感じたわけなんだ。それはこの戯曲に盛られた音楽だ。特に作者が意識して試みたのではないだらうが。成程、御殿では「奥は豊に音楽の調子も秋の哀れる」で例の管絃があり「竹ス」で馬子唄、杉酒屋では井戸替へ連中の底抜け騒ぎがあるといふ譯だね。

A 元右衛門ぢやないが、まだある。先づ初段の語これは歌舞伎の舞臺には無論上らないが……入鹿入定の條で、蝦夷は我子の死を餘所に、雪見の哀を開いてゐる。酒池肉林の歡樂境へ、物憂げな鐘の音が響いて来る……雪おろしに交つて、……蝦夷は遂に酒宴の席を奥の間へ移す。跡に入鹿の夫人は

夫の後世を弔ふため、雪を集めて五輪の形を作り自分は雪中に端座する。合掌する耳元へなまめかしい三味線の音と歌の聲が聞えて来る……入定の鉦がそれに交る。

B 入鹿の入定は僞はりで、實の父蝦夷に自害させてまで王位を得ようとする奸悪なところは、シルレルの『盜賊』のフランクを連想させるよ。

A 二段目の芝六の住家では「出世の雲が見えるぞ」と明の六ツを遅しと待つ芝六。「夜明は我子の最期時」と明け行く空を悲しむその妻。そして人間の喜びも、悲しみも知らず顔に高鳴る音……。

B 「同じ鐘の音でも、聞く人の心によつてその響が違ふ」これは池田丹後の臺詞だが、此場なども人形よりは人間の演技に俟つべきものだ。

A 「山の段」ではあの象徴的な吉野川の流れ……その響は絶えず見物の想像の裡に響いてゐる筈だ。

B さうだ。作者はたしかに流れの音を頭に置いて書いてゐる話の違ふが、これも本文を讀んで返して氣付いたことだから言つて置く。或劇評家が六代目のお三輪御殿の評の中に、官女達にいちめられた後、花道へ懸ると、袂の端を食ひ切るの
は現代のヒステリーじみるとあつたが、本文には「憎いは此家の女めに見かへられたが口惜いと、袖も袂も喰ひ裂きく」とある。六代目は本文を讀んだのだ。

B 話が面白く成りかけたが、まア一ぶくさせて貰はう。



妹脊山雑話

川尻清潭

『妹脊山婦女庭訓』が近松半二、三好松洛、竹田小出雲等の
 合作である事、その書卸しが明和八年の正月に大阪竹本座の人
 形淨瑠璃に上演された事、又歌舞伎としては同年大阪の小川座
 に上演された事、江戸の舞臺に掛つたのは、安永七年市村座の
 春興行であつた事等は、既に記録に繰返されてゐる所であるか
 ら略す事にする。

院本の『妹脊山』は全編五段に出来て居て『三笠山の御殿』
 は四つ目の奥に成つて居る、但し現在舞臺に使用して居る脚本
 は、原作よりもずつと省略されてあるが、それにしても一幕一
 時間何十分を要するのである、時に三つ目の奥の『花渡し』か
 ら出す事もあつたものゝ、それでは優に三時間以上も掛るので
 時間制限のある此頃の興行には殆ど出す事が少く、『道行戀の
 緒環』を一つ別に離して、大切の淨瑠璃物に用ひるなど、鷹治
 郎がそのお三輪を勤めて出した事もある。

明治十六年十月の新當座で此『妹脊山』を出した時は『花渡
 し』『道行』『御殿』の三場を一番目に据えたのであつたが役割は團十
 郡の入鹿大臣、後室貞高、杉酒屋の娘お三輪、先代左團次の久
 我之助、漁師饒七實は金輪五郎、福助の息女雛鳥、荒巻彌藤次
 先代芝翫の大判事清澄、烏帽子折求女、豆腐買おむら、助高屋
 高助の橘姫と云ふ顔觸れの大一座で、今でもよく覚えて居る事
 は團十郡の貞高が、花渡しをするのに、普通舞臺前に水へ流す
 のが當り前であるのを、館の後の山へ殊更に貞高の遠見の子役
 を出した好みであつたのは、中央が急流であるが爲に上から流
 さなければ、すぐに向ふ岸へは着かないといふ譯なので、團十
 郡と云ふ人は此時代から理屈屋であつたのを窺ふ事が出来る。
 尚又『御殿』へ出る團十郡の入鹿大臣役はお約束通り金龍の
 衣裳を着けて、皇子の鬘を掛けて、其上長く房々とした髻を附
 けて出たので、其後入鹿を勤める俳優が、多くは此型を學んで

髻を附けるのであるが、團十郎の入鹿が長髻を附けたのは、二役のお三輪に變る都合上、前々から襟白髻を濃く塗込んであるのを隠す爲で、入鹿の役だけとしたならば、生れは髻を附けない方が本當なのである、それから入鹿が大盃で酒を飲む所、是は『盡きし盡きせぬ歡樂の』と云ふ義太夫の文句の終りで飲み切て仕舞ふのが多いのであるが、それでは入鹿が手持無沙汰に成るので、花道から饒七が出て來ても構はずゆつくりと飲んで居て、饒七の台詞があつてから盃を下へ置くと、それから入鹿が饒七の方へ目を移す順序が附く譯で、些細な事ではあるが名優にはそれだけの工夫があつたのである。

もう一つ團十郎のお三輪に就て話がある、それは團十郎好みから『道行』の場て求女の裾へ緒環の白糸を結び付ける、尤も外の俳優は結び付けた仕科だけを見せて、眞實に結ぶのではないが、例の理屈屋の團十郎は、それでは心持が悪いと云つて緒環の太白の白糸を實際に求女の裾へ結び付ける、求女は是を引摺つて花道の揚幕へ入る、所で揚幕の中に待受けて居る團十郎の弟子が、右の白糸を繰り込むと、花道の附際まで來て居るお三輪の緒環が、揚幕から引張られる勢ひでグルグルと廻轉する其いゝ時分を見計らつて揚幕の中で鈎を用ひて糸を切る、糸が切れてピンと跳返ると云ふ趣向なのである。所が或日の事繰るのに力が入り過ぎて、お三輪の手から緒環が飛んで花道の中程ま

で來て仕舞つた、其時團十郎のお三輪は、此突然の失敗にも拘らず、即座に膝を突いて緒環の所まで這つて行き、兩袖で緒環を押へ付けた形が、どう見ても仇氣ない娘に成つて居て、抜ける程にうまかつた爲に、一層の事は團十郎の型として残したからうと云ふ評判さへあつた位である。

然るに最近大阪の人情淨瑠璃が、東京の歌舞伎座へ引越し興行をした時、右の『妹背山の道行』が出て、文五郎の遣つたお三輪の人形が、手に持つて居る赤糸の緒環を飛ばす、其緒環は求女の裾に引摺られて行く心に、手摺の上をコロコロと轉がすそれをお三輪が追つ駈て兩袖で押へる仕科を見せた、是は果して文五郎の創案なのであらうか、それともに團十郎の話を自家の藥籠中へ取入れたものであらうか、偶然の場合とすれば頗る面白い事である、折があつたらば聞いて見たいと思ひ乍ら、機會を得ないで其儘に打過ぎて居る。

『花渡し』に就ては團十郎の大判事、五世菊五郎の真高に工夫にいい話が澤山あるが、中座の五月興行に『御殿』だけを上演すると云ふ事であるから、他は略して御殿の舞臺の事の話を進めて見れば、『御殿』での主役であるお三輪、それは昔大太夫と呼ばれた半四郎の勤めたのが最も評判がよく、團十郎がよく團十郎のお三輪も大太夫の型を移したもので、取分け『草の靡くをしるべにて』の義太夫で、花道を駈出して出て來て、廣

い明き御殿のあちらこちらを呼歩いた末、「お留守かえ」と聞く所、本文には無い事であるが、これが減法によかつたので、後世お三輪を勤める程の人は、誰しも此型を用ひない者は無いのである。

此場のお三輪の着附に、昔は段鹿の子を用ひたものである、但しそれはお三輪に限らず、お七でもお染でも、娘形は段鹿の子が定式になつて居た時代で、團十郎は花草の地色の石持に色入の袴を十六むさしに見立てた意匠を付けたのが評判がよく其模様を半襟に染て、玄治店の福田屋萬兵衛と云ふ贅澤屋の呉服店から賣出して非常に流行したものである事を覚えて居る、しかし必ずしも十六むさしが型と云ふ譯ではなく、今の歌右衛門もお三輪は得意藝の一つであるが、衣裳には鎗梅の意匠を用ひ、下着は大段鹿の子が定めやうになつて居る、帯は誰も割鹿の子を使用するが、菊五郎は身體の肥つて居るのを補ふ爲に、此割鹿の子の兩端へ入れる黒縞子の中に註文がやかましいのである。

扱仕科に就て少し計り言はうなら、お三輪が鞞君様に逢ひたいと云ふのを聞いて、官女がこれをなぶる所、「登る階長廊下」の文句で、道具を替へて廊下で見せるものもあり又御簾中に見せる型もあるが、それ等はあまり用ひられて居ない、多くの官女にいろ／＼無理難題を言掛けられ、結局左右から檜扇で

顎を押付けられて、「千秋萬歳の」を歌ふ所、「千箱の玉」の文句を強らされて、「チ、チ、チ」だけを云ひ義太夫で「千箱の血の涙」と取る所、若女形が手離しの儘で泣く難關で、普通の女ならば襦袢の袖を出して泣くから色氣もあるが、此場合は若い娘が手離しで泣く顔を見せなければならぬのが、むづかしい事の一つに教られて居る、殊に晩年の團十郎が、歌舞伎座でお三輪を勤めた時の如き、皺の寄つた長い顔へ白粉が斑に付いて居て、出て来た時には如何に團十郎でも、是ではどうもならぬと思つて居るうち、藝の力で顔がやさしく眞からいらしい娘に見えて来るので、成程流石に名優は違つたものだと、大に見物を驚かした事があつた。

次にお三輪の「竹に雀」の踊になるのであるが、官女に取圍ませて支度をして白布の手拭で鉢巻をする、此手拭は前方豆腐買のおむらの腰に在つた物を、突かれる時にお三輪の手に残すのが活用の工夫であるが、實際は大きい結綿鬘へ鉢巻をするので、蔭で長い手拭と取替へて右結びに締るのが定めである、此支度中に櫛と簪とを取り、片肌を脱ぎ、裾は下着ごと片端利にして長襦袢を見せる、即ち段鹿の子の下着と長襦袢の模様とが新規に現れて目先が變るのである、それから踊に掛るのであるが、團十郎の型は是も理屈から割出して殊更には踊らない。歌右衛門の方は踊らうとして恥しい思ひ入で顔を隠して打伏すの

を、官女が左右から『コレ』と檜扇で下を叩くのキツカケに左の袖を擔ぎ、右の手の緒環を下向に前へさし伸してキツパリ極つて、踊の掛りを明瞭させるのが、斯うした歌舞伎劇には最も適當して居る。

結局お三輪は官女の檜扇で脾腹を打たれて倒れる、是をキツカケに獨吟になり、官女たちがお三輪の鬮の根へ、御幣に切つた紙をぶら下げ、更に平舞臺に落ちて居る島臺を、緒環の糸に結び付けて帯へ巻込む等の悪戯をする、のちに此紙を引くと鬮が擲ける手順であり、又島臺は前方入鹿が饜七に投打つた物を活用するのである等、いづれも出道具や小道具が無理なく働いて居る工風にも敬服の價がある、お三輪は如此に苛められて歸り掛ける所へ、御殿の奥から官女の聲で、『三國一の掣を取濟ました、しやんくく』の臺詞が聞えて來るので、お三輪が『あれを聞いては』と嫉妬の相を現す事になるのであるが、心ある俳優は爰で急に嫉妬を起さず、前々の官女に苛められて居る間から、嫉妬の準備をして置く事で、それにはそのやうに官女の方の苛め方が手強くなければならないので、官女を勤める俳優と打合が必要であるのは言ふまでもない事である右の苛めの官女役が女形から出すに三階から出るのは昔からの定めであり、以前は俗に水引と云ふ白の着附に緋の袴の拵へであつたのが、團十郎の好みから、袴を着るやうに成つて、引續き今日

に及んで居る譯で、是も理屈からはさうもあらうけれど、斯くて昔の佛は段々に崩れて行くのである。

尙お三輪の演所としては落入がある、其處には前にお三輪が官女たちから祝言の儀式を教られた時に遣つた三寶が殘されてある。お三輪は最後の苦しみに此三寶を押つぶす仕科をするのが、是又小道具の活用である、さうして緒環の糸を手に擲めて死ぬのにも、殊更に糸を擲めるのではなく、もがき苦しむ手、つまり空を握る手先の動きに、自然と糸が擲まつて引くのが工風なのである、お三輪は前後まで、此白糸の緒環を愛人の求女として是を手離さぬ事がお三輪の役の一つの心得としてあるのである。

次に饜七の事を云へば、普通は下げて來た貧乏徳利の酒を、息を吐かずに飲むのが、古く行はれて居る型であるが、近頃では三口に區切つて飲み、跡々へ酔つた心を見せて勤める事が行はれて居る、是も理屈から來た事で、饜七は金輪五郎であれば、一ト息にのんでも酔はない人で差問えない譯である、それよりもまだくおかし事は、始め入鹿が右の貧乏徳利へ目を付けて、『未だ日本へは渡らぬ兵器、彼の唐子なりと聞く、飛道具の類ならん、方々心を附けられよ』と云ふ臺詞のある所から考へて、仕丁が饜七を取巻く時に貧乏徳利を短銃のやうに構へて、徳利の口を捕手の方へ向けて入る珍型を見せた上、更に

御簾の竹を一本折つて煙管掃除する所などを見せたのがある、脱線も爰まで行けば却つて罪がなくて面白い位なものである。

その鱧七が獨舞臺に成つて、二疊臺の上へ寝る所、團十郎は大小を投出す度に下から一本く突出す鎧を、兩手に握つて呼吸を入れてウンと突き返すので、椽下で「ウン」と云ふ聲を聞かせて鎧を引かせ、市川流の荒事として「ヤットコトツチアウントコナ」と云つて寝る、芝翫の型は椽の下の左右からブツ違ひに突出す鎧を豆絞りの手拭で十文字の中を結へ、それを枕にして寝る派手な仕科をする、それから長柄の銚子を取つて庭の菊へ酒を注いで見ると、それが毒酒で菊の花がしぼむのを見て、長柄の銚子を高欄へ突いて見得をする、是は五代目菊五郎が最もいい形を見せた所であるが、先代訥子が鱧七を勤めた時には長柄の銚子を持つた左の手を斜上りに長く伸し、右の手の握つた拳を顎の下に構へて大見得を切つた。平凡な形とは云へ外の人のあまりに用ひない事で、然も頗る立派であつた事が目に残つて居る、銚子を突くのは餘程全體の形がよくなければ締らない、柄の小さい俳優などは須らく訥子型を襲用する方がいゝ。今回の興行に新訥子が改名披露の爲参加して居るに就つて思ひ出した此話を記して置く。

又鱧七が足を出して、長い袴を擔いで入る三重の引込みなど

も、團十郎と菊五郎とでは、附添つて入る相手方に對して註文に相違があつた位で、勤める俳優の腕前次第で見物をいゝ心持にさせる事の出来る所である。二度目の金輪五郎になつてからも、丁寧なのは二度引抜くのもあるが、先づ一度引抜くだけが普通であり、其引抜きのキツカケも人に依つて詭が違ふ、又後上りに段へ上るのも一つの型になつて居る事である。爰へ出る二人の捕手に被衣を冠せて女の姿をさせるのは團十郎好みなものである。其外の役々、豆腐買ひのおむら、玄蕃と彌藤次等の心得もいろ／＼あるが與へられた紙面が盡きて居るから、爰には略す事にする。

最後に此頃では此「御殿」を白木造りの白木の高欄附に飾る事が行はれて来たが、以前はすべて黒塗で、高欄も勿論黒に限られて居た。それと云ふのが昔は現在の如く大道具が贅澤でなく、立派な御殿と云へば「千本櫻」の四の切の御殿、「奥州安達ヶ原」の御殿「先代萩」の御殿等が主なるもので、右はいづれも定式物の黒塗立襷欄間の御殿を使用する事に定められて居るのであるから、其生れから行けば「妹背」の三笠山の御殿も襷欄間を用ひるのを古格とするのである。斯かる大道具の規定等は、其道の棟梁でさへ知る者が無くなつて居る今日、特に参考として序に書添へて置く次第である。



「明鳥」の隨筆

高原慶三

去年の秋、或橋の灘萬ホールで故雀右衛門の追悼座談會が「次の時代の會」で催された時、わたくしは雀右衛門の印象について、『舞臺ではやさしい女形であつたが、生前たつた一度逢つた印象によると氣焔家といふより、むしろ打てば響くといふ強みのある男性的な人のやうに思つた。丁度、書物によく知られてゐる坂東しうかのやうなバラガキな鐵火肌の様女形のに思はれる』といふやうな意味の事を申上げた。するとその席にゐられた坪内士行先生はわたくしの觀察に一面の眞理がある、喜劇家の日常が、案外に生眞面目なと同様、女形の日常といふものは、思つたより男性的な強みのあるものもあると、幾分肯定して頂いた。

話は一轉するが、『明鳥』の記憶についてわたしは雀右衛門の浦里が記憶が新しい。

梅幸のそれも見たやうでもあり見ないやうでもある。歌右衛門のそれも見たやうでもあり、見ないやうでもある。といふ程に記憶臆だが、雀右衛門の浦里だけは不思議に頭にこびりつてゐる。

時次郎は福助であつた、今から四五年前の事のやうに思ふ。あの時、雀右衛門が病態であつたか、どうか一寸今考へ出せないが、とにかく餘り健康體のやうに思へなかつた。トボ／＼と雪に責められた、あの姿は不思議な病的さがわたくしの記憶を深うした所いかも知れない。

由來『明鳥』の浦里といふ役には妙な因縁があるやうであるそれは先代の澤村田之助が脱疽になつて五體が満足でなくなつてこの浦里で當たといふといふ話が残つてゐる。

この田之助といふ人が、役處は女形だつたが、これが亦、雀

右衛門同様非常に鼻張りの強い負ず嫌ひな役者だと聞いてゐる浦里を通じて、雀右衛門と田之助にわたくしはある共通したものがあつてやうに思へてならない。

ところが、先に一寸名だけ申上げた阪東しうか、これが亦浦里役者として今にその名が残つてゐるのだからいよ／＼もつて話が面白くなつてゐる。

大阪で自刃した八代目團十郎の時次郎と、しうかの浦里が壓倒的な當り狂言だつたといふ事は團十郎が死後その以前に既にしうかも他界してゐたと見えて團十郎追善の洒落本まで出来て二人が冥途で『明烏』の芝居をやつて閻魔の廳を騒がせたといふ筋のものを曾てわたくしは讀むだ事がある。今手許に何等の参考書がないからその洒落本の名は思ひ出せないがとにかく團十郎としうかの『明烏』は清元太兵衛の淨瑠璃と三拍子揃つて江戸市中を騒がせたといふから、まづ浦里はしうかに發して、田之助に中興し雀右衛門に畢るといふやうな結論は多少獨斷ではあるが、必ずしも當らずとも遠からずではなからうか。

しかも、そのしうか、田之助、雀右衛門の三女形に共通するものは、内部にもつ反撥的な男性の強さ、鼻張り、利かぬ氣であるからいよ／＼妙ではなからうか。

まづたくこの浦里といふ役を見ると、徳川末期の所謂煽情劇

露骨にいふと變態性劇、西洋流にいふとサドイズムの極致である。綺麗な女、しかも性慾的な媚しい赤の長襦袢一枚になつて髪は亂れ、胸蕪かすやうな素足のまゝ、雪に苛まれ、竹箒で毆りつけられる。

これ以上のサイドズムが何處にあるだらうか、責め苛まれる快感、捨鉢な満足、そこにこの芝居の變態的な美を發見し能ふのであらう。

こゝに於てわたくしは論理を進めて、しうか、田之助、雀右衛門の心境に立入つて見るに昔から女形の心得として、すべてが立役本位に控え目勝な舞臺生活のうちに掩ふても掩ひ難い内心の反抗性反撥性は何によつてこれを爆發させやうとするのか即ち屈服の快感、棄鉢の満足、自分自身を苦しめることによる、自己本能の陶醉、かうした變態心理のものを盛込むためには浦里のやうな役は最も適當である、といふことになるのであるまいか。心理學者の同感を得れば幸甚である。

こんどは田之助の娘婚に當る宗十郎が時次郎をやつて福助が浦里をやるのだらうか。

福助のやうな温厚な柔軟性に富むだ人が、かうした變態的な役に成功するだらうか？

わたくしは思ふ以上の三人の浦里とは別な意味に於て期待されるであらう。



鱧七

私見

高谷伸

歌舞伎の美しさは繪である。といふことは、たびく述べた歌舞伎の面白さにナンセンスがあるとといふことも一度ならず述べたことである。

妹背山婦女庭訓の四段目は、この二つの特色を發揮したものの一つである。

繪模様の美しさは、きまりきまりの型にもあれば、舞臺上の色彩の配合にもある。

ナンセンスの興味は全體の構想の内に溢れてゐる。

蘇我入鹿が「上にも天子に等しい豪奢を極めて金ピカの御殿に納まつてゐる所へ、鱧七といふ漁師が辨慶縞の長袴をつけて徳利をぶらさげて『入鹿どんは内にか』と言つてやつてくる。

賤の女お三輪が小田巻の糸にひかれて、亦御殿の内に迷ひこんでくる。鎌足を中心に姫と賤の女との愉快な三角關係が發生する。さらに面白いのは貴族蘇我氏に仕へる官女が馬子唄をうたひだしたり、『このホテツパラ』がよれたりする。

大織冠たるべき鎌足がたゞの烏帽子折になつて女に惚られて

道行戀の小田巻と洒落てゐる。この淡海公、志賀廻家以上にナンセンスにできてゐる。

さうした矛盾がすこしも不快を感じさせないで事件が運ばれて行つて、結局入鹿誅伐といふ史上の大事事件に進んで行く。あしべ踊などより數等うまい技巧である。

さうした面白さからこの狂言に出る鱧七實は金輪五郎今國は自分も手がけた縁故もあるので、演出上の手記から要點を二三抜粹する。

鱧七の扮装は夜具縞の襦袍に木綿大辨慶の長袴、後には胸から筒袖襦袢のボタンを覗かせ朱鞘金具の大小刀の鰐ぎわに貧乏徳利を繩でからげでぶらさげる。頭は大銀杏か椎茸、首に豆絞りの手拭を結ぶといふ風である。顔は砥の粉と朱土であるが近年だん／＼白くなる傾向がある。大體がナンセンスだから寫實を忌むし、お三輪との對照といふ色彩上の條件もあるから、これは思ひきつて赤づらの方が正しい。

『物もう、頼みやんせう』と揚幕で聲をかけて、チヨボにつ

れてのそりく〜と出る。そして御殿の入鹿にこの漁師がこの頃近くへ宿がへしてごんした鎌どんから仲直りのしるしぢやとこの酒を贈られたと、プロとブルの對稱奇抜を極めたナンセンスぶりを發揮する。

徳利を飛道具とまちがへたり、毒酒だと疑ふ騒ぎなどあつて毒見だと言つて鱧七が飲み、あるか知らんとあつてみて、玄蕃彌藤次を驚かし、皆飲んでしまつたと碎けるイキなど、いつも延若の巧さに感心させられた。

それから入鹿との問答に、きまつた面白い型が三つある。

『どれ、聞きやんせう』で見上げる片あぐらの形が第一、『そりやまたなじよに』で反り身に裏むき、兩手をうしろへつく型が第二、『どうでござんす』で、階段に腰をかけ長袴の裾を下へ流し、兩手を内懐から出して、胸でぶつちがひに組んだ型が第三である。東京ではこゝで『つがもねえ』をやつた人もあると聞くがそれは亂暴である。助六と鱧七と間違へられてはたまらぬ。

鱧七を人質だと言ひ棄て、入鹿が入ると、鱧七は二重へ上り『面倒な』と大小を投げだすと、床下から槍が出る。これで故人屠阿彌などは豪傑としては槍など無關心でゐるとの説を立てられたが、芝居としてはやはり見得をしたるが面白いと思ふ。故多見藏は兩手を組んできゆと見たし、延若はぐつと立身で睨

み槍の穂先をぐつと握つた。自分の所論としてはこれらを探るそれから官女の戯れがあつて、毒酒を草にかけた見得になるこれは長柄を勾欄につきその上に兩手を重ねるのが普通であるが、右手に持つた長柄を斜上に一杯にのばしてさし出し左足を勾欄へかける訥子の型もあり長柄を投げ棄て兩手で頼杖をつく珍型があるといふ話もきいた。しかし、普通の型を一步進めて長柄をついた右の手に左の肘を乗せるやうに頼杖をつき、やゝ首を曲げて見下ろす型が一等よいやうである。これは芝翫型として傳へられるもので、多見藏が宗十郎のお三輪で演じた時にも見たものである。

次に官人が矢襖を作つて迎へにくるので、『俺からさきへ行かうかい』で、階段の上で片足をろして袴の襟をしごく見得があり、悠々と引込むのである。

東京では袴のマチを裂いて肩へ引掛けて入るのが多いやうであるが、見た目もうるさく悪趣味である。關西ではこれは今の右團治がやつたのを見たりである。やはり延若や多見藏のやうに、大きくふところ手して悠々とする方が大芝居である。延若の鱧七は明治四十三年の顔見世以來數回見てゐる。殊に大正十一年正月にはお三輪と鱧七の二役をやつてゐる。この時は舞臺を三杯に使つてゐた。舞臺装置の一杯三杯論になると、この前の近八のやうにまだ問題が紛糾するといけなから、三杯目はそつと出して筆を擱く。

歌舞伎の春を讀へ

大阪の好劇家へ私議提出

富田泰彦

私の議論は、常に「鴈治郎の場合」を透して、なければ成立しない。之れは讀者諸君に取つても、勿論、鴈治郎氏に對しても、甚だ迷惑なことも知れない。だが、止むを得ない。大阪劇場を語るには、何うしても「鴈治郎の場合が」、モーチヴとなつて考へて置かねば、ならないほどに、妙に私の頭腦にこたわつて來た。

× 「澤正を失ふた後の新國劇の惨めさは何うだ。」

「それは、當然のことさ、澤正の魂を失ふた屍のやうな劇團は、生理的にだつて崩壊作用を起すのは順序さ。」

「澤正の輝きは、偉大であれば、あるほど、その光りの消へた後の暗さ、冷たさ、遺瀾なさは判るぢやないか」

「ぢやア、澤田正二郎は、全く傑物だつたのだね」

「さう、……儘に傑物だ。だが名優さは云へないだらうぜ、矢張新時代の風雲兒と云つた方が妥當かな」

「風雲兒」

「さうだ。彼は運命の開拓者だつた。勿論歌舞伎のそれとは比較することが、誤つてゐるやうだが、その風格から見ても、彼獨自の藝術境を開拓したと云ふだけの功績なのだ」

× 「其處へ行くさ、傳統藝術としての栓柱にある歌舞伎俳優は、運命的にも、甚だ損な卦を背負つてゐる譯だね」

× 「鴈治郎の場合」に、澤正を今更思念することを、既に私の論旨の出発点をあやまつてゐるかも知れないが、世間には私以上の謬を懷いてゐる人も澤山あるらしい。——一體鴈治郎と澤正と何方が偉い？ など聞きかねないほどに、情ない現代なのだ。さう云ふ人はきつこ、太陽と慧星とが……聞くらう。

× 團、菊を知る劇道は、兎もすると、此の二名優を神様のやうに、この舞臺を恰で奇蹟を見るが如くに傳へる。だが、その團、菊時代は、歌舞伎を以て、民衆娯樂の最良のものとなされ、従つて崇拜もされてゐた。所謂最良と云ふのも、一種の英雄崇拜なのである。

× 第一その時代は、環境的にも、今日から見れば餘程恵まれてゐる。新派も漸く稀薄守代と云つて可い。従つて斬劇がない。曾我廻家劇はない。況して築地少劇場などは——お剩けに粗末な劇などに「寄りは斬るぞ」式の格を破つた太刀風に僻易されることもなかつた。

× 斯うした劇場境に見た上に、更に映畫の發達などは、夢にもない。歌劇からレヴエウへ、さうしてジャズとラヂオのテンポとかスピードとかを問題にされることもなかつた。謂はば觀衆側には、たゞ歌舞伎を嘔

敵討後研究

道行の百集

勝彦輔綴

(三) 敵討檻褻の錦

道行對の花かいらぎ

ふりだすや、とつかけべい、さきろけろ、おなべがかいもちぬれたらもてこい、がつてんだ、夕べも三百、張込んだはだかで道中がなるものか、コリヤ〜してこいな、どつこいふれ〜ふりこめさ、我身世にふる花の雨、涙の雨のはてしなき、伊兵衛佐兵衛が忠義より女房〜を故郷の共に寄邊の苦界させ、他人ならざる小姑一文奴と姿を變へ、敵をねらふ御主人に何卒巡り合の驛泊り〜を袖奉加こんのだいなし造りひげ、油氣もなき備後の國はや立出でて行く先は、あてどもなみの吉井川およぎかねたるその日すぎ、木賃どまりのかてつきて、げんこに命つなぎ錢くれずはとをろくられたらふるべい、投げる足どり拍子とり、鳥毛とり〜振もよき、今度殿

様おのぼりよ見れば柿の頭巾に尻をでつかいからけてヤツンヤツン挾箱持ちなヤヨなまなかに、なまなかに似たる面影を若しや尋ぬるお主かと鳥毛振さし走りつき見れどもそふでない〜あれでもないかない〜是でもないかない〜ない似ぬこそ道理と奴が顔見合せ、われはわれで、おれはおれだちがうた〜違はぬものはだいなしと、互の忠義は一つ對のはさんばこちな、ヤヨなまなかに急げばまわる車坂、急がぬ顔でぶら〜とのぼる兄坂弟坂、親の敵を持ちし身は、ともに天をいただかぬ古きためしもあるなれば、空を馳り地を巡り、出逢ふ所は優曇華のはなく〜しくも斬りまくり念なる本望遂げたまふ、お旦那達の御武運を祈る心のそこづゝを、むばらの宮居伏し拜み、さととばなれて濳傳ひ、よりもかく子の聲〜に、つらい〜と逢ふ度びにおしやるのエチャエ、つらかひしまししようきつとめ、つとめのこんたんでのエチャエ、かはるまくらはかず〜とおしやるのエチャエ

かはるなかにもたどひとり、わすられぬ、こんたんでのエチヤエ、唄ふ一と節川竹の憂き事聞けば可愛やと思ひ出したる妻の事、互に口に得云はねど、言ひ合せたる如くにて、目に洩る涙はら〜と、髭は流れてまだら顔、浪々の身を悔み泣き。からつばらしやにがいにしてやくるな、お身ほへるな、歎きな、肌身には女房がはりの此金を妻と思へばいそ〜と急げば早く浪花津の町〜小路船つきを、もし其人やおはせんかと、此所の人立ちかしこの辻宿入り下馬先おつたてろ、か〜とうぶんつけ手先を揃へおとがい突き出してこめさ、とん〜とがらしかつかぢり、ごかんのふゆでもかじけない、ふれやふる〜ふるさとを、お立ありしは去年の秋、世上は春と知りながら我身の花はまださかで、心をつくしみをつくし主人にたづね大阪の町に暫らくやすらひぬ。

(四) 三國小女郎曙櫻

道行女蝶の闇

花の世やぞと吹きすさむ仇嵐、月にさへぎる雲間のいろ、空さへやらぬたまやが身の、置所なき越路瀧、馴れし故郷もお尋ねの日影をおほふ胸の暗れんぼのやみのくらがりも、目かいの見えぬ小女郎をば忍びくるわをうつせみの、もぬけの旅

も梅が香の浪速をさしてはる〜と、はるけき野邊に咲いたつま、身に思ひあるな〜に、一と目見せたやお知り顔の今を盛りの菜種畑にたわむれる蝶も夫婦連れ、蝶は菜種の味知らず、これは戀路の初旅衣、あやめもわかぬ時鳥、泣く聲血をばく思ひにも今一と聲の限りに君がたのみし数〜を心にふくむおばまのいそ、浪のうね〜おひしげる祈りもたがぬ妹脊どり手を曳き合ふて行く道の、はてし長濱これかとよ、小女郎はもすほら〜と三國の廓ではのきし、おとこじまんのきりようさへ、櫛の齒入れぬ髻のつきを、せめて此目が見ゆるなら、すへつけづりつなでつけん、かみのちかおもいつわりとわけも涙にばら〜と落つることたの雁上りも二人が中は石よりも堅田の浦と見渡せば、いとど思ひもかすかなる、女心をいさめんと、コレ小女郎、出村の新兵衛に、繩掛けさせ我身替りにつき出し、生き長らへる生取も、そなたの願ひを叶へんため、必ずくど〜苦にもつて、つかへや、癩の起らぬやう、案じさせてたもんなや、ソレそれほどに氣をつくし心をつけて下さんすりや、一倍勝る思ひ草、苦しみの種なるぞや馴れ初めよりも可愛らし眞實そうな男氣と誠を盡し二世かけて、變るまいぞとちかいの起請、すいほどぐちと諺の、たとへにちはがはぬ其中に戀ほど愚痴なものはない、逢ふ度毎に言ひ交し、樂みは苦しみの、また苦しみ

劇壇その日く

(四月十四日)

江戸時代の噫無情

呪はれた浪人の半生

新聲劇の「黑白染分草紙」

角座四月の新聲劇二の替りは十七日初日にて
田中總一郎原作鳥江鏡也新脚色「黑白染分草
紙」五幕十一場にてこの狂言を以つて一座は
その價值を世に問はんとする意氣込だが場
割は

(一)の(一)江戸に近い甲州街道(一ノ二)新宿
廊附近の居酒屋(二)の(一)上野山下のホ茶屋
(二)の(二)本郷元町和泉屋の店先(三)の(一)下
谷三味線の畔り(三)の(二)下谷練堀町の屋敷
町(三)の(三)元の三味線堀の畔り(四)の(一)根
津権現裏料亭梅本(四)の(二)同家離座敷(五
の(一)小石川音羽の裏長屋(五)の(二)牛込見
附々近の坂の下

尙料亭梅本の場では常警津「小夜衣千太郎」の
道行の一段を語らせ中田の森田陽之助、辻野
の倅新吉、富士野のいるはのお妻、和歌浦の

女師匠文字歌、藤本の千太、中
村のお倉等で情緒的な舞臺も見
せ、全体に從來の舞臺と變つた
テンポの早い本格的な新演出を
試みる由同狂言の梗概は左の如
し

文政七年の春、十六年以前に妻の不義の相
手だつた男を殺して佐渡へ流された森田陽
之助は放免さつて憧れの江戸へ歸つて來
る。今度こそは何か世の中のために善い事
をして平和な生活を送りたいと望むが、舊
友不死身の千太が、いかさま賽を使つて既
に稲田紋十郎の私刑を受けんとするを助け
たばかりに、その男と道伴れになり再び元
のやくざ者となる、陽之助には十六年前に
本郷和泉屋の門先に捨てた娘があつて人知
れずそれを探ると、お京といふ十七の娘盛
りになつてゐた、この娘の養子新吉は市
警津の女師匠文字歌に欺されて遂にお店
に歸らずなる、めぐる因果にこの新吉も水
茶屋女お妻と結びつけた、この間紋十郎
といふ悪黨はお京に戀して誘拐せんとする
陽之助はこれを知つてお京を助けたり和泉
屋一家のために働く、しかし彼はもう既
にその間同心殺しや辻斬りの兇狀持となり
世を恐ぶ身となつた、善人にならうとして

社會の壓迫からまた悪人となつた陽之助を
憐んで同情する、一方お妻新吉の爛れた戀
にも破綻の時が來たお妻は新吉の許婚お京
を嫉妬の餘りこれに危害を加へんとする時
忽然と現はれた陽之助はお妻を斬つてお京
を助ける、そして初めてお京の親子の名
乗をあげ切腹してお妻と死ぬ、實にお妻、
そ彼の十六年前の女房であつたといふ呪は
れた宿命を描いた江戸末期の「噫無情」で
ある――

(四月十六日)

吉右衛門一座

神戸に出演す

十六日初日の神戸八千代座

東都大歌舞伎中村吉右衛門、坂東三津五郎、
中村時藏等の大一座は十六日初日毎日午後三
時開幕で神戸八千代座に出演する事になつた
この處は

吉右衛門、三津五郎、時、紅若、吉五郎
三津六郎、三津之丞、大三郎、吉藏、多加
雄、秀也、松之助、七三郎、茂之太郎、米
吉、鏡助、九藏

等が主なる顔ぶれだが、この度の狂言は一香
目が「一谷嫩軍記」陣屋より組討まで二幕中
幕上「大原女」長唄連中に下山崎紫紅作「亂れ



「狂言」二幕二番目が福地櫻痴居士作「俠客春雨
傘」四幕に大喜劇「月の巻」長唄連中の名狂言
揃ひである。

(四月十六日)

新聲劇替り狂言

『黒白染分草紙』

總配 役

角座の新聲劇替り狂言「黒白染分草紙」五幕
十一場は愈々明十七日初日にて晝夜二回開幕
であるが、大衆的な興味多いもので新聲劇一
派によつて劇となるものを小説化し、今また
小説より新聲劇上演ものとして劇化されたも

のだけあつて一層興味
を惹くものである。因
に替り狂言は十七日よ
り二十六日までの十日
間限りでお名残りとな
る。その總配役は

和泉屋養子新吉(辻

野)番頭當吉(新田)

目高の三次、同心山

崎(小波)斑猫の吉五

郎(武澤)ト州の熊吉

(鈴木)森田陽之助(

中田)和泉屋文藏(名

越)手代和助(山本)斤山榮次郎(芝田)不死

身の千太(藤本)稲田紋十郎伊川常磐津

文字歌(和歌浦)仲居お藤(若柳)水茶屋女

おふく、藝者おその(濱地)水茶屋の女おな

み(富士岡)娘お松 水茶屋の女おつや(若

宮)和泉屋娘お京(金剛)仲居お梅(吉野)文

藏女房お牧(澤井)士平のお屋(中村)水茶屋

のお妻(富士野)

新國劇のお名残り

新國劇は十六日初日にて二の替りお名残り狂
言を出したが、この度の出し物「赤穂浪士」
中篇、完結篇に行友李風作の「澤田正二郎の

死」三幕を以つて必死の熱演にてお名残りな
飾つて居る

(四月十七日)

嵌役揃ひの總配役で

愈々十八日初日の辨天座

辨天座花形大歌舞伎は愈々十八日初日でお

目見得と

同じく二

部興行を

以つて二

の替りお

名残り狂

言書の部

一番目大

朝連載、

悟道軒圓

玉口演川

中總一部

脚色一松

平長七郎

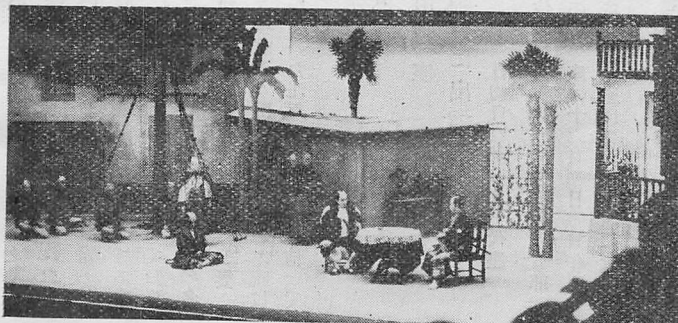
「後篇三

幕中幕一

艶姿女舞

衣」酒屋

の段大喜





では求女に扮しウント氣の變つた所を東西大歌合せに見せ、二番目では大森痴雪氏作「邏羅船」三幕で九年振りに定評ある大舞臺を見せる、尙新作は田中總一郎氏作並に演出にて岡辰押切帳より新作された「開化夢見草」一幕にて延若、魁を中心にして花形連の獨壇場潑瀾たる新演出が期待されて居る、淨瑠璃旅路の花智、清元連中は傳三郎改め澤村訥子の襲名披露狂言にて清元連中は榮壽太夫正壽郎連中が久々の來阪、大喜劇は「明烏夢泡雪」山名屋の場にて富士松連中が來阪、清元連中と共に東西合同の大歌舞伎に一層の花を添ゆる△浪花座は我童、ひさし、義直、長三郎、敏大、大吉、橋三郎、霞仙、成太郎、徳三郎、秀郎等に福助、壽三郎、九團次等の關



西花形揃ひに東京よりは新派の花形河合武雄始め村川式部、大矢市次郎等來阪新舊合同にて初日は二日と決定狂言は食滿南北氏作「櫻のもと」三幕に瀬戸英一氏作「今様かしく」一幕三場に「夏時雨清十郎塚」三場他一篇と所作事の由△角座は小織十吾一派の家庭劇が歸演廿八日初日にて正午と五時半の晝夜二回開演第一詩賀里人作「スポーツ狂時代」一場第二

て執演△辨天座は交樂座人形淨瑠璃が久々の歸演にて一日初日を出す狂言は前「谷藏軍記」大序より陣屋まで中「戀女房染分手綱」四條河原より子別れまで切「三十三間堂棟由來」平太郎住家より敵打までと決定△千日前樂天地は貞樂一派は本月限りにて來月は新潮劇一派が歸演と決定。

× × ×

村瀬仁三郎作「五月晴」
二場第三「眠駱駝物語」
三場第四「よづ健康」二場
第五茂林寺女
福作「隠しなはん」二場

の新作揃ひに

四月二十七日

家庭劇の

總配役

二十八日初日の角座

角座松竹家庭劇は二十八日初日を出したが總配後は左の如し
運動具屋鳴尾敬造、古物商櫻井仙之助、宮川新三郎(天外)町田貞藏(三郎)女房おいく流し芳造父新平(天照)食料品商高橋藤七



櫻湯主人櫻井萬藏、モダンボーイ石田(富士島) 帽子屋木村忠助、百姓次郎吉、家主佐兵衛、金貨星野(一郎) 息子良一、父親松太郎、母おふみ(十音) 妹おやす、妻お梅、女給(紅子) 石河) 娘お千代、女中お松(春日) 娘春子(小鬼) 糊賣おきん、妻お繁(米津) 夫人秀子、妹英子(桃谷) 娘おせき、町田靜子(妻光子) 東田市松、平斧目の半次(藤村) 小濱豊、宮川保夫(高田) 叔父町田猪十郎、紙屑買久六(小織)

五月一日

新舊合同劇の

總配役

愈々二日初日の浪花座

浪花座の五月興行は愈々二日初日(初日)二日目に限り午後一時半平日は午後二時開幕で第一「櫻のもこ」第二「今様かし」第三「お染久松道行浮埜鷗」第四「股旅草鞋」第五「夏時雨清十郎探」等新作揃ひの新舊合同大歌舞伎を出すがこの度の總配役に左の如し

織田信方、師匠六三郎、手代清十郎、お夏(我童) 室綾の方、藝妓定榮(霞仙) 結城三郎 忠重、子分與助 玉藏(侍女霜野) 福太郎) 伊葉野政平、女房お民(卯之助) 遠藤米市、子分儀平(關三郎) 早瀬采女、侍女お孝(我久之助) 種田兵内、浴客、侍女おちろ(我久三郎) 織田公達、松若(義直) 自警團、岩名の

嘉十、手代勤十郎 橋三郎 油屋多三郎(敏夫) 堀勘四郎氏家、船頭源兵衛、役人遠藤秀七、溝口六太夫、船頭五兵衛(大吉) 松村七郎高直、兎の富五郎(壽三郎) 藝妓かしくのお勝、勘八女房おつる(河合) 兄文藏、飯岡勘八(大矢) 母親おくら、下女おやま、村田) 柳原新左 門清道、猿曳、若き禪僧(長三郎) 文藏女房お八重、侍女おのぶ(成太郎) 油屋娘お染、侍女小よし(ひさし) 丁稚久松延太吉彌(延太郎) 芥見左近、中八棒中丸之馬、乳母小萬(徳三郎) 瀬川由縁之丞、腰元お貞(我童) 押付け銀平、手代源十郎(九圓次) 乳母初女(蓮女) 溝口興七(福助)

東西合同の

總配役

愈々初日を出した中座

中座五月興行東西合同大歌舞伎は愈々一日午後 時半開幕にて初日を出した。一番「妹脊山婦女庭訓」御殿の場新作田中總一郎作開化夢見草」一幕「淨瑠璃」旅路の花笠」清元連中二番目大森痴雪作、暹羅船三幕大喜利「明烏泡雪」富士松連中の總配役に左の如し

烏帽子折の求女實は藤原淡海唐津屋榮三郎(鷹治郎) 山名屋浦里(福助) 豊腐買おむら、番頭平兵衛(右團次) 腰元お輕、妹お小夜(扇雀) 番頭鶴松(吉三郎) 岡田主馬(八百藏) 荒卷彌藤次(政次郎) 妹橋姫杵屋小さん母親お

ちせ(魁車) 禿ゆかり(春景) 醫者香牛齋(蝦十郎) 村上靜六(鷹正) 武田源之助(九團次) 宮越玄番、宮戸川兼八、高坂嘉門(箱登羅) 尼僧良由遺手おかや(蓮女) 唐津屋治右衛門山名屋四郎兵衛(市藏) 漁師鱈七(實は金輪五郎) 伊丹屋重助、天竺徳兵衛(延若) 蘇我入鹿大臣、早野助平、悍吉十郎(訥子) 孤兒おふじ(訥升) 前川八平(田之助) 杉酒屋娘お三輪、手代新七、春屋時治郎(宗十郎)





松本泰三

久振りで東京から川尻清潭氏の原稿をいたゞく事が出来た。伊原青々園氏にもお願ひしたが旅行中でしたゞけなかつた。残念に思つて居る。

長谷川伸氏が御多忙中にも拘らず十五枚の原稿を惠送トされた、改造四月號に出た「股旅草鞋」も本月浪花座に上演されてゐる同劇を見る前に一讀される事は是非必要な事だと思ふ。

本號からは印刷所を便利かへる事にした。それに依つて道頓堀にはかつて見なかつた、七七半ポイント活字を使用する事になつた、即ち「股旅草鞋」「今様かしく」の芝居ばなしがその活字である、六號ルビ附きナリも讀みやすいと思ふ。

本月は遅くとも五日には發行する豫定であつたが口繪寫眞とその編輯に思はぬ日數がとれた、蓋し道頓堀回刊以來の出来ばへを見せ居る。

道頓堀案内欄を「劇壇その日」と變更してみた。それは本誌が忠實に道頓堀劇界の状況を讀者に報告する意味から新設されたものである。この欄は毎月に記載出来なかつた通信記事や、道頓堀發行以後に撮影した寫眞を掲載することにした。この欄さへ讀めば道頓堀一ヶ月の状況が一目瞭然にして解る。

道頓堀編輯部

- 鳥江 鏡也
- 田中 總一郎
- 山上 貞一
- 瀨川 春郎
- 住田 冬一
- 大塚 克三
- 松本 泰三

鷹治郎は本月も道頓堀に出演してゐる。本年になつて以來五ヶ月

繼ぎの大奮闘は、實に劇界稀有のレコードである。

南木芳太郎氏から「明治大正六十年史」を頂くことになつてゐたが、止むを得ざる事情ができて、當分は頂けなくなつた、御了承を乞ふ。

田中總一郎氏と瀨川春郎氏が新しく道頓堀編輯部員として活躍して下さる事になつた。

訂正

口繪十頁中川三郎の丁稚久松は猿曳の間違ひに就き訂正す。

昭和四年五月一日發行
月刊「道頓堀」第四年
第三十二輯

誌代は前金でお拂ひを願います。

郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵税五厘)

昭和四年四月廿八日印刷
昭和四年五月一日發行

大阪府南區久左衛門町八条地
松竹土地建物興行株式会社
編輯者 鳥江 鏡也
發行者 鳥江 鏡也

大阪府西區江戸堀南通二丁目三三
印刷者 林 善次郎
大阪府西區江戸堀南通二丁目三三
印刷所 村田 文泉閣

大阪府南區久左衛門町八条地
松竹土地建物興業株式會社
發行所 道頓堀編輯部

電話(二二四〇番)
六六八五〇番

婦人の便秘に

婦人は種々な原因の爲に便秘を起し易く便秘者は絶えず頭痛、眩暈、嘔心、腹部緊張、鼓腸等を起し不愉快なるは勿論身体に悪影響を與へるものなり、故に便秘ある婦人はラキサトールを用ひて便通を調節すべし。

下劑 ラキサトール

粉末錠劑、全國藥店にあり



大坂市東區道修町
發賣元 株式會社 益野義商店
東京市日本橋區岩附町

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和四年四月二十八日印刷
昭和四年五月一日發行

道頓堀第四年五月號

金參拾錢
(郵一錢五厘稅)

若く明るの顔になる

リート白粉

阪大・京東
店商平替尾平